

木船廃寺跡 2 次

2011 年 3 月

(財) 浜松市文化振興財團





瓦集積検出状況（北東から）



主要軒瓦

例　　言

- 1 本書は静岡県浜松市東区和田町 315において実施した木船廃寺跡（2次調査）の発掘調査にかかる報告である。
- 2 当発掘調査は保育園増築工事に先立つ事前調査として実施した。調査は、社会福祉法人浜松市児童福祉園の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市文化財課が補助執行）のもと、財團法人浜松市文化振興財団が行った。木船廃寺跡については、1977年に静岡県教育委員会と浜松市教育委員会によって発掘調査がなされている。今回の発掘調査はこれに続くものであり、木船廃寺跡の2次調査とする。
- 3 当発掘調査にかかる契約期間は平成 22 年（2010）6 月 1 日から平成 23 年（2011）3 月 10 日までである。このうち現地発掘調査は、平成 22 年 8 月 16 日から 8 月 31 日の間に実施した。調査面積は 130m²である。
- 4 現地発掘調査は鈴木一有（浜松市文化財課）が担当し、原田和子（浜松市文化財課非常勤職員）、吉田悠歩（浜松市文化振興財団非常勤職員）が補助した。
- 5 整理作業は鈴木一有が担当し、吉田悠歩、原田和子の補助を得た。本書の編集、執筆は鈴木が行った。
- 6 調査の記録、出土遺物は浜松市文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 8 本書では、埋蔵文化財包藏地の名称を示す場合に限り「木船廃寺跡」と表記し、古代寺院名を指し示す場合は「木船廃寺」とする。
- 9 遺構の略記号は以下の通りである。

SD：講　　SK：土坑　　SP：小穴　　SX：遺物集積

- 10 遺物番号は、試掘調査、本調査で出土した遺物について、遺物の種別にかかわりなく、それぞれ連番を付した。
- 11 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

弥生土器・土師器・瓦
 須恵器
 灰釉陶器・山茶碗・青磁

- 12 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博

教育委員会→教委

浜松市文化振興財団→浜文振

浜松市立和田小学校→和田小

奈良国立文化財研究所→奈文研

木船廃寺跡 2 次

目 次

卷頭図版

例 言

第1章 序 論 1

- 1 調査にいたる経緯 1
- 2 遺跡をめぐる環境 2
- 3 本発掘調査の方法と経過 13

第2章 検出遺構 15

- 1 検出遺構の概要 15
- 2 検出遺構の詳細 16

第3章 出土遺物 23

- 1 出土瓦の概要 23
- 2 発掘調査出土遺物 33

第4章 総 括 53

- 1 木船廃寺出土瓦の時期と系譜 53
- 2 長田郡家と木船廃寺 56

図 版

図 版 目 次

卷頭図版

- 1 瓦集積検出状況（北東から）
- 2 主要軒瓦

図 版

- 1 瓦集積検出状況（2トレンチ、南東から）
- 2 1 調査区全景（南東から）
- 2 1 トレンチ SD01（北東から）
- 3 1 トレンチ SK04（南西から）
- 3 1 2 トレンチ検出遺構（北東から）
- 2 2 トレンチ SD01（北東から）
- 3 2 トレンチ SX01（東から）
- 4 SX01 検出状況（北西から）
- 5 1 SX01、SD01 検出状況（北東から）
 - 2 SX01（東から）
 - 3 SX01（北西から）
- 6 軒丸瓦A類
- 7 軒丸瓦B類（1）
 - 8 1 軒丸瓦B類（2）
 - 2 軒丸瓦C類
 - 3 軒丸瓦D類
 - 9 1 主要軒平瓦
 - 2 軒平瓦
- 10 丸 瓦
- 11 平 瓦（桶巻作りの諸例）
- 12 平 瓦（広端面圧痕の諸例）
- 13 平 瓦（線刻の諸例）
- 14 平 瓦（一枚作りの諸例）

挿図目次

Fig.1	木船廃寺跡の位置	1	Fig.29	丸瓦の諸例	30
Fig.2	木船銅鐸	2	Fig.30	平瓦の諸例	31
Fig.3	木船廃寺跡周辺の遺跡分布	4	Fig.31	広端面圧痕の詳細	32
Fig.4	木船廃寺跡出土礎石	5	Fig.32	広端面圧痕の原体	32
Fig.5	礎石実測図	5	Fig.33	線刻の諸例	32
Fig.6	周辺の調査状況	6	Fig.34	寺院造営以前の出土遺物	33
Fig.7	木船廃寺跡周辺の地籍	7	Fig.35	SX01 出土遺物 (1)	35
Fig.8	木船廃寺跡試掘調査 (1)	9	Fig.36	SX01 出土遺物 (2)	36
Fig.9	木船廃寺跡試掘調査 (2)	10	Fig.37	SX01 出土遺物 (3)	37
Fig.10	木船廃寺跡試掘調査 (3)	11	Fig.38	SX01 出土遺物 (4)	38
Fig.11	試掘調査出土遺物	12	Fig.39	SX01 出土遺物 (5)	39
Fig.12	1 トレンチ調査状況	13	Fig.40	SX01 出土遺物 (6)	40
Fig.13	2 トレンチ調査状況	13	Fig.41	SX01 出土遺物 (7)	41
Fig.14	SX01 調査状況	14	Fig.42	SX01 出土遺物 (8)	42
Fig.15	現地説明会	14	Fig.43	SX01 出土遺物 (9)、SK07 出土遺物	43
Fig.16	木船廃寺跡 2 次調査地の詳細	15	Fig.44	SD01 出土遺物 (1)	44
Fig.17	検出遺構	17	Fig.45	SD01 出土遺物 (2)	45
Fig.18	土層断面	18	Fig.46	SD01 出土遺物 (3)	46
Fig.19	主要遺物出土状態	19	Fig.47	SD01 出土遺物 (4)	47
Fig.20	SX01 詳細	20	Fig.48	SD01 出土遺物 (5)	48
Fig.21	SX01 完掘状況	21	Fig.49	SD01 出土遺物 (6)	49
Fig.22	SD01 詳細	22	Fig.50	SD01 出土遺物	49
Fig.23	軒丸瓦復元模式図	24	Fig.51	包含層出土遺物 (1)	50
Fig.24	軒丸瓦の諸例 (1)	25	Fig.52	包含層出土遺物 (2)	51
Fig.25	軒丸瓦の諸例 (2)	26	Fig.53	包含層出土遺物 (3)、遺構出土遺物	52
Fig.26	軒平瓦復元模式図	27	Fig.54	木船廃寺出土瓦の時期と系譜	53
Fig.27	軒平瓦の諸例	28	Fig.55	西遠江における古代瓦の分布	55
Fig.28	丸瓦と平瓦における製作技法の比率	29	Fig.56	永田遺跡群の詳細	56

第1章 序論

1 調査にいたる経緯

本船廃寺跡の概要 本船廃寺跡は、静岡県浜松市東区和田町にある古代寺院跡である。1954年、区画整理に伴う道路工事現場から大量に瓦が採集され、その存在が広く知られるようになった。出土した瓦は飛鳥時代（白鳳期後半、7世紀末葉～8世紀初頭）にさかのほる古い時期の特徴を備えており、本船廃寺跡は浜松市内でも最古の寺院跡として、以後注目されることになった。また、正確な出土年は不明ながら、瓦が採集された近隣地で礎石が出土し、古代寺院の存在を示す有力な証拠とされていた。1977年には、静岡県教育委員会と浜松市教育委員会によって遺跡内の発掘調査が実施された。しかし、この調査では、古代寺院にかかる明確な遺構は確認できず、本船廃寺の正確な位置は長らく不確かな状態が続いていた。

開発計画の浮上 2009年、本船廃寺跡の中核部と目される地点において、保育園舎を増築する計画が立てられた。この計画を受け、2009年4月に開発対象地に3箇所の調査区を設けて試掘調査を実施した。試掘調査では開発対象地に古代の瓦を大量に含む溝（後述するSD01）を確認し、寺院跡が埋没している可能性が指摘された（本章第2節）。

本発掘調査の実施 試掘調査の結果を受けて、開発に伴う遺跡の取り扱いについて事業計画者と浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）によって協議が重ねられた。その結果、保育園舎増築に先立ち、建物の基礎部分に合わせてトレチ状に本発掘調査を実施し、重要な遺構が検出された場合には適宜調査地区を拡張することで合意した。発掘調査は（財）浜松市文化振興財団が受託し、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が指導にあたった。現地調査は2010年8月16日から8月31日にかけて実施した。調査面積は130m²である。

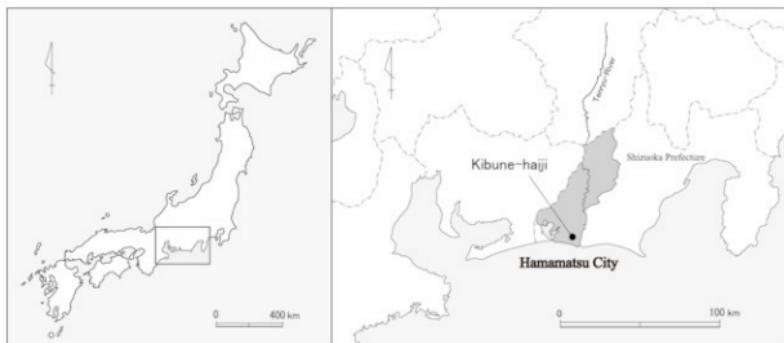


Fig.1 本船廃寺跡の位置

2 遺跡をめぐる環境

(1) 立地環境

木船廃寺跡は、天竜川右岸に広がる沖積平野に立地する。JR 東海道本線の天竜川駅から西に 500m ほどの地点に相当し、近年、宅地を中心とした開発が顕著である。

天竜川は沖積台地である三方原台地と磐田原台地の間にある東西 10km ほどの谷間を縱横に流れを変え、大量の土砂を堆積させながら沖積平野を形成した。天竜川が形成した沖積平野には、自然河川や沼地などの低位面と居住が可能な高位面が交錯する複雑な微地形が広がっている。天竜川の流路は木船廃寺跡の東側にあるが、中世以前においては複数の本流があり、平野部内には数多くの支流を從えていた。木船廃寺跡の西側を流れる宮井戸川は、今の姿こそ小規模な河川であるが、かつては天竜川下流域の主要河川の一つであったとみられる。現在の宮井戸川は工場地や鉄道路線の下に埋没し、その流路を追うことが困難であるが、その下流は、芳川、馬込川と合流し遠州灘に注いでいる。

(2) 歴史的環境

縄文時代 天竜川平野への人びとの進出は、縄文時代の終わり頃に始まる。木船廃寺跡の北西約 1.0km に位置する宮竹野跡遺跡では、縄文時代晚期後半の条痕文土器が出土しており、本格的な農耕社会への移行以前に、沖積地へ進出した痕跡が確認されている。ただし、この段階における居住地や生業など、詳細はいまだ不明確である。

弥生時代 弥生時代中期になると、天竜川平野への進出は本格化する。木船廃寺跡の西 1.7km にある将監名遺跡では、弥生時代中期中葉に始まる拠点的集落が確認されている。この段階には低位面を水田として活用し、その隣接地に居住地を設ける農耕集落の具体像を知ることができる。

続く弥生時代後期には遺跡数が激増し、人口増加の実態がうかがえる。木船廃寺跡から半径 1.0km 圏に限定しても、山の神遺跡、越前遺跡、松東遺跡、森西遺跡、大蒲村東Ⅱ遺跡、飯田遺跡群（山寺野遺跡、寺西遺跡）などで当該期の遺構や遺物が確認できる。とくに、山の神遺跡や松東遺跡では集落を取り囲む環濠が確認されており、拠点的な集落であったと目される。弥生時代後期に用いられた銅鐸にかんしても、木船廃寺跡（木船銅鐸出土地）やツツミドオリ銅鐸出土地などで三遠式銅鐸がそれぞれ 2 口出土していることをはじめ、松東遺跡では近畿式銅

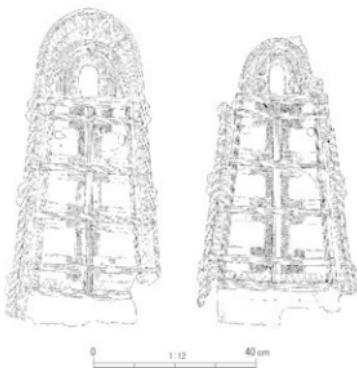


Fig.2 木船銅鐸

鐸の飾耳破片が、森西遺跡では銅鐸形土製品が出土している。このように、木船廃寺跡を中心とした天竜川右岸地域は弥生時代後期の遺跡、遺物の集中度が高く、農耕社会の中心地として繁栄していたことが分かる。

古墳時代 古墳時代になると、台地上での居住地形成が増加し、沖積地での集落規模が縮小する傾向が認められる。ただし、小規模ながらも沖積地における集落は存続している。近隣地では、大蒲村東II遺跡、越前遺跡、山の神遺跡などで古墳時代前期における生活の痕跡が確認できる。以後、沖積地における集落の造営は、規模の拡大や縮小を繰り返しながら、継続していったものと捉えられよう。なお、天竜川平野では古墳の造営が極めて低調である。沖積地に居住していた人びとの墳墓は、平野の両岸に広がる三方原台地や磐田原台地の縁辺に築かれたものと捉えられよう。

飛鳥・奈良時代 乙巳の変（645年）を経て、古代国家確立に向けての動きが本格化する。国郡里（郷）制の区分として天竜川流域の各地には、敷智、長田、庵玉、石田（磐田）といった各郡が設定された。このうち、木船廃寺跡がある浜松市東区の大部分は、長田郡に属していた。長田郡は、『統日本紀』の記載によって、和銅2年（709）に長上郡と長下郡の2郡に分割されたことが知られる。分割後の当地は長上郡であった。木船廃寺跡が所在する和田町の中心集落は、近代までは「永田」と呼ばれていた。「永田」は近世以前には「長田」とも表記されることもあり、山の神遺跡からは「長田」と墨書きされた山茶碗片が出土している。地名からうかがえるように、長田郡の中心部は現在の和田町であったと想定できる。

遺跡の様相からも、木船廃寺跡を中心とした一帯に長田（長上）郡家（以下、「長田郡家」と表記する）を想定できる要素が数多く認められる。白鳳様式の古代瓦を用いた木船廃寺は、長田郡の中枢部に7世紀末葉から8世紀初頭にかけて創建された古代寺院である。古代瓦は近隣地にも広がりをみせており、越前遺跡、森西遺跡、宮竹野際遺跡などに出土例が知られる。

木船廃寺跡の南西250mほどに位置する大蒲村東I遺跡では、古代の木簡が4点出土しており、長田郡家の存在を雄弁に物語る。また、木船廃寺跡に隣接する森西遺跡では円面硯が、越前遺跡では陶馬が出土している。さらに、宮竹野際遺跡では規格性がある奈良時代の掘立柱建物群が確認され、自然河川からは円面硯や風字硯、数十点の墨書き器など官衙的様相がうかがえる遺物が出土している。宮竹野際遺跡にも長田郡家にかかるる何らかの施設が設けられていたとみてよいだろう。

以上、木船廃寺跡を中心に、周辺に展開する越前遺跡、森西遺跡、大蒲町村東I・II遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡は長田郡家にかかるる相互に関連性をもった遺跡群と捉えられる。本書では、これら長田郡家関連の遺跡群を総括して「永田遺跡群」と呼称しておきたい。

平安時代 天竜川平野の各地には古代末期から中世にかけて莊園や神宮（伊勢神宮）の御厨が多数経営されていた。当地域には遅くとも11世紀後半に蒲御厨が成立していたとみられる。蒲御厨は開墾主体である蒲氏が伊勢内宮に土地を寄進したもので、蒲氏は莊官としての権利を得て御厨の經營にあたった。

鎌倉・室町時代 鎌倉時代になると、蒲御厨には収益権である地頭職が設けられ、北条氏が地頭になった。その後、蒲御厨の地頭職は大河内氏に渡り、室町時代には幕府御料地となったが、1391年に東大寺に寄進された。室町時代後半になると、今川氏の支配が強固になり、蒲御厨は解体した。

2 道跡をめぐる環境

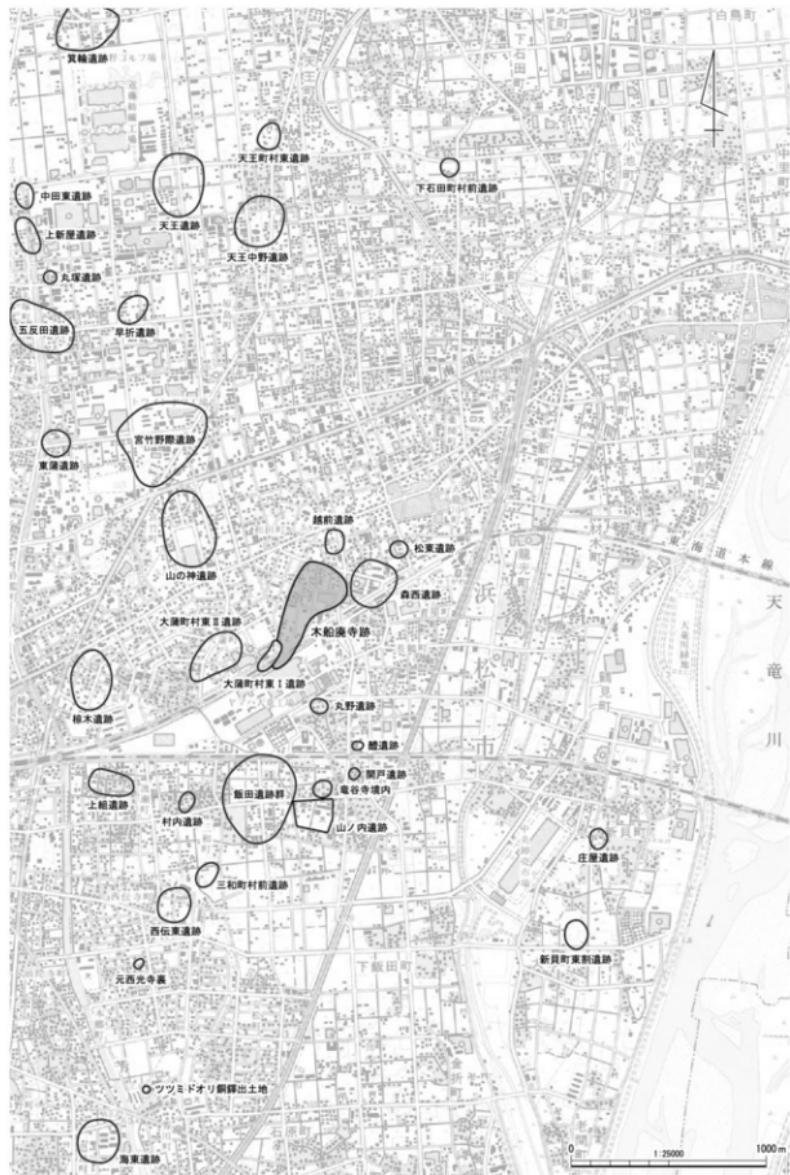


Fig.3 木船磨寺跡周辺の道跡分布

(3) 木船廃寺跡をめぐる調査履歴

採集資料 1954年に区画整理に伴う道路工事によって古代瓦が出土し、木船廃寺の存在が広く知られるようになった。瓦が出土した地点は、今回の調査区の北側に接した道路付近といわれている。この時に出土した瓦には、山田寺式と川原寺式の軒丸瓦4点が含まれ、現在、浜松市博物館(Fig.24-1・8)と浜松市立和田小学校(Fig.24-7、Fig.25-5)が所蔵している。この時の採集遺物には、軒丸瓦以外にも丸瓦(Fig.29-3)や平瓦(Fig.30-3)が大量にあったようであるが、軒平瓦は確認されていない。軒丸瓦のうち、Fig.24-1とFig.25-5は資料化がはかられ、以後、木船廃寺出土品の代表例として、『静岡県史』(静岡県 1992)を始め、数多くの文献に取り上げられるようになる。

礎 石 (Fig.4・5) 出土した年代は不明確ながら、今回の調査地点の北北西200mほどの地点で、排水路設置工事中に礎石が出土したといわれている。現在この礎石は、木船薬師堂の境内に移動されている。長軸83cm、短軸80cm、高さ54cmの割り石の上面に、直径32cm、深さ2.2cmの円形の抉りがみられる。この礎石は柱穴式の塔心礎に形態は似るが、石材が小さすぎる点から、本格的な塔の心礎とすることはできない。通有の大きさとは異なる建物に用いられた可能性があるが、類例が乏しく詳細は不明といわざるをえない。

1次調査 1977年には静岡県教育委員会と浜松市教育委員会が共同で、寺域の確認を目的とした発掘調査を実施した。同調査を木船廃寺跡1次調査とする。この調査は、1954年に瓦が出土した地点を中心に、幅2m、長さ5mのトレンチを合計16箇所に設けて調査を進めたものであったが、寺院の痕跡をうかがわせるものは何も発見できなかった。土層の状況も中世の包含層が確認できた程度で、古代の地層は全く検出できていない。古代に遡る出土遺物も少なく、わずかに瓦片や奈良時代の土器や須恵器がみられる程度であった。こうした調査成果から、木船廃寺は本格的な古代寺院とすることは難しく、小規模な堂宇を備える程度のものであったと評価されるようになる(平野 1990)。



Fig.4 木船廃寺跡出土礎石

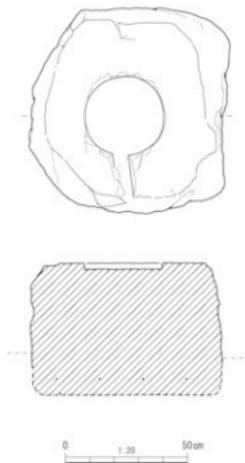


Fig.5 細石実測図

2 遺跡をめぐる環境

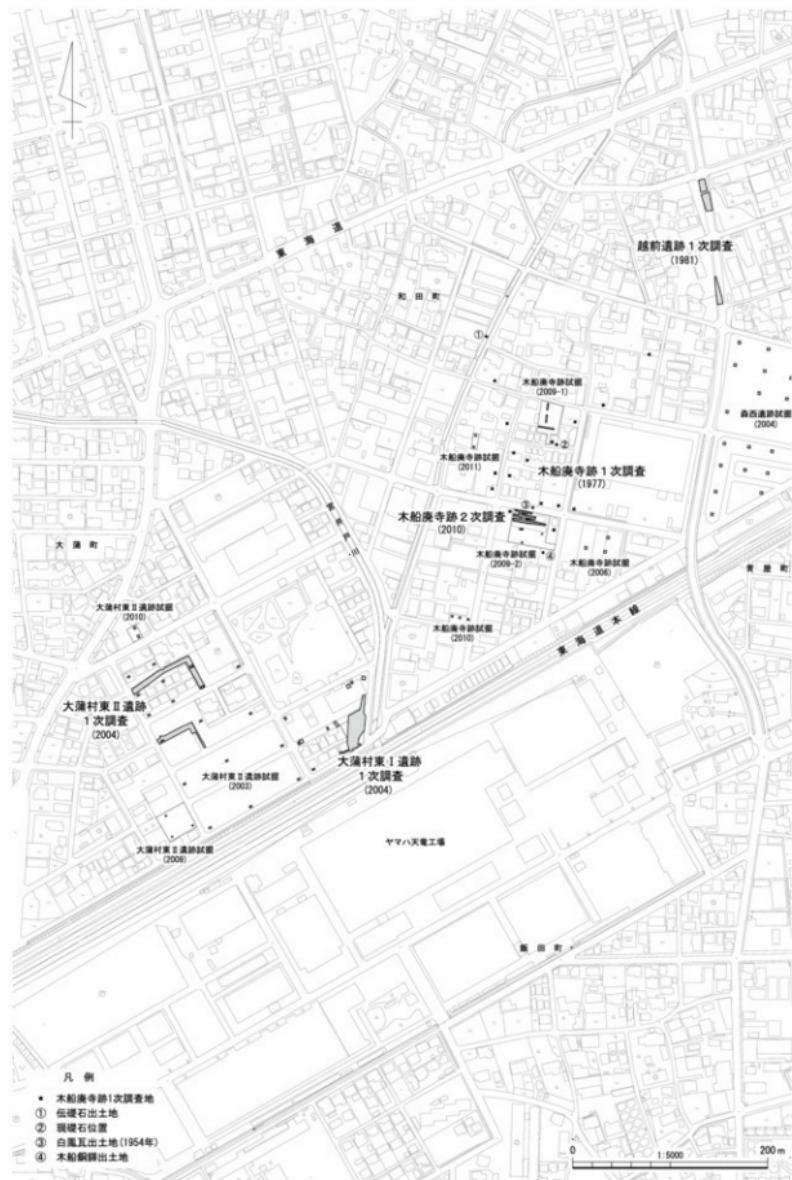


Fig.6 周辺の調査状況

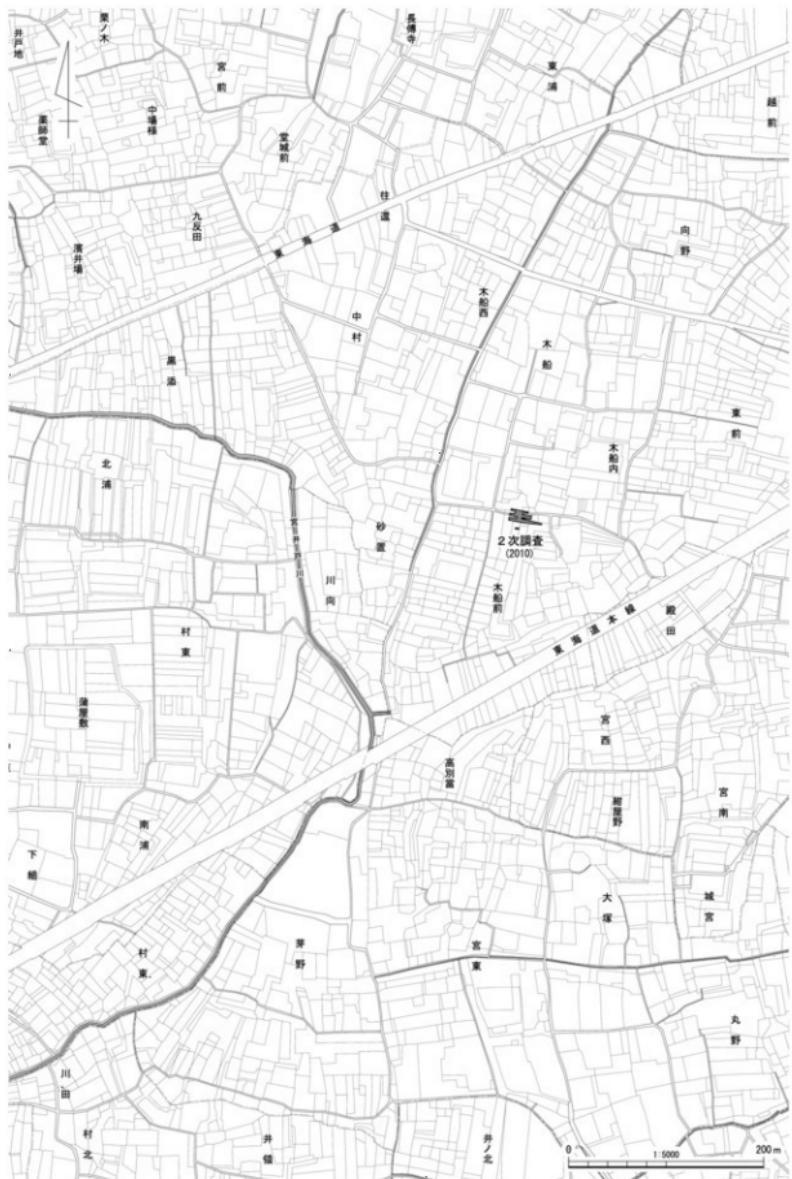


Fig.7 木船廃寺跡周辺の地籍

Tab.1 木船廃寺跡における調査等一覧

区分	調査名等	調査年など	調査面積	特記事項	文献
採集	—	不詳	—	礫石の出土	—
採集	—	1954	—	古代瓦の採集	—
本調査	1次調査	1977.2～3	160m²	基盤層位の確認	静岡県教委 1978 「静岡県文化財調査報告書」第18集
試掘	試掘 2006	2006.10	12m ²	範囲外	浜松市教委 2010 「平成20年度浜松市試掘調査概要」
試掘	試掘 2009-1	2009.3	36m ²	軒丸瓦の採集	(財)浜文振 2011 「木船廃寺跡2次」(本書)
試掘	試掘 2009-2	2009.4	7m ²	土器集積の確認	浜松市教委 2011 「平成21年度浜松市試掘調査概要」
試掘	試掘 2010	2010.2	12m ²	古代遺構を確認	浜松市教委 2011 「平成21年度浜松市試掘調査概要」
本調査	2次調査	2010.8	130m²	瓦集積の確認	(財)浜文振 2011 「木船廃寺跡2次」(本書)
試掘	試掘 2011	2011.1	8m ²	古代瓦の出土	—

試掘調査の進展 2000年以降、工場地が広がっていたJR天竜川駅の北側区域に再開発の波が押し寄せ、新規に住宅地の造成や集合住宅を建設する動きが活発化した。木船廃寺跡やその近辺においても開発に伴う本発掘調査や試掘調査を行う機会が増え、遺跡の実態が明確になりつつある。

木船廃寺跡で実施された試掘調査は、2006年から2011年3月までの間で5回にのぼる。このうち、2009年3月に実施した試掘調査（試掘 2009-1, Fig.8）は、木船薬師堂の北側に隣接した地点を対象とし、軒丸瓦（Fig.11-18）が採集された。調査地は、中世以降の造成土が厚く堆積していたが、その下に奈良時代の包含層が確認できた。この試掘調査で出土した古代瓦の量は周辺の調査地点と比べると多く、木船廃寺にかかる何らかの施設が埋没している可能性が考えられる。

（4）試掘調査出土遺物

試掘 2009-1 出土遺物 (Fig.11) 1～22は2009年3月に実施した試掘調査（試掘 2009-1）において、出土もしくは採集した遺物である。1～5が1トレンチ、6～11が2トレンチから出土した資料で、12～22は調査地において採集したものである。

1は7世紀後葉の須恵器坏身、2が13世紀頃の青磁碗、3・4が17～18世紀頃のかわらけ、5が17世紀頃の焙烙である。6は8世紀の有台坏身、7は8～9世紀頃の須恵器壺、8は9～10世紀頃の土師器壺、9は9世紀後半～10世紀頃の灰釉陶器碗、10は12～13世紀頃の山茶碗、11は13世紀頃の青磁碗である。12は7世紀後葉の須恵器坏身、13～15は8世紀の須恵器で、それぞれ摘み蓋、壺、壺である。16は7～8世紀の土師器壺、17は12世紀頃の山茶碗である。

18は重圓文綠蓮華文軒丸瓦である。詳細は、第3章（1）に記す。19～22は平瓦である。凹面には布目痕が残り、凸面はナデなどの調整がなされている。20の凹面には桶の痕跡が観察できることに加え、19～22は凸面を調整することから、ここに紹介した平瓦は桶巻作りで製作されたものであることが判明する。

試掘 2010 出土遺物 (Fig.11) 23・24は2010年2月に実施した試掘調査（試掘 2010）において出土した遺物である。いずれも8世紀頃の遺物であり、23は須恵器の短頸壺、24は須恵器の長頸壺である。なお、24は底部を糸切りした後にケズリ調整がなされている。焼成、色調の特徴から、猿投窯産の可能性が高い。

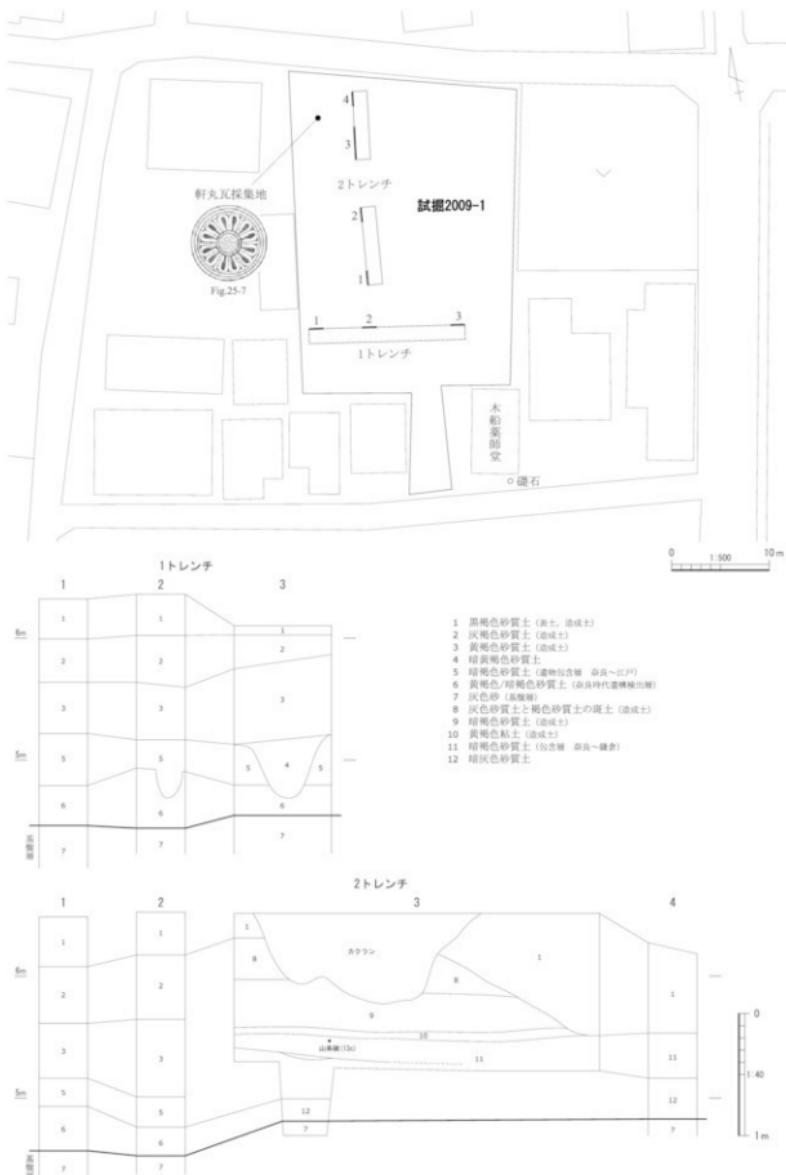


Fig.8 木船廐跡試掘調査 (1)

2 遺跡をめぐる環境

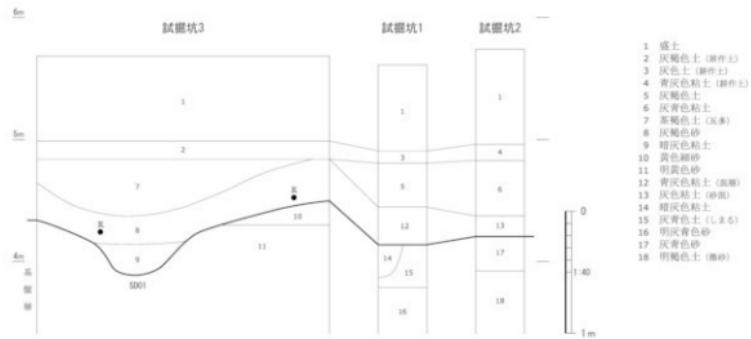
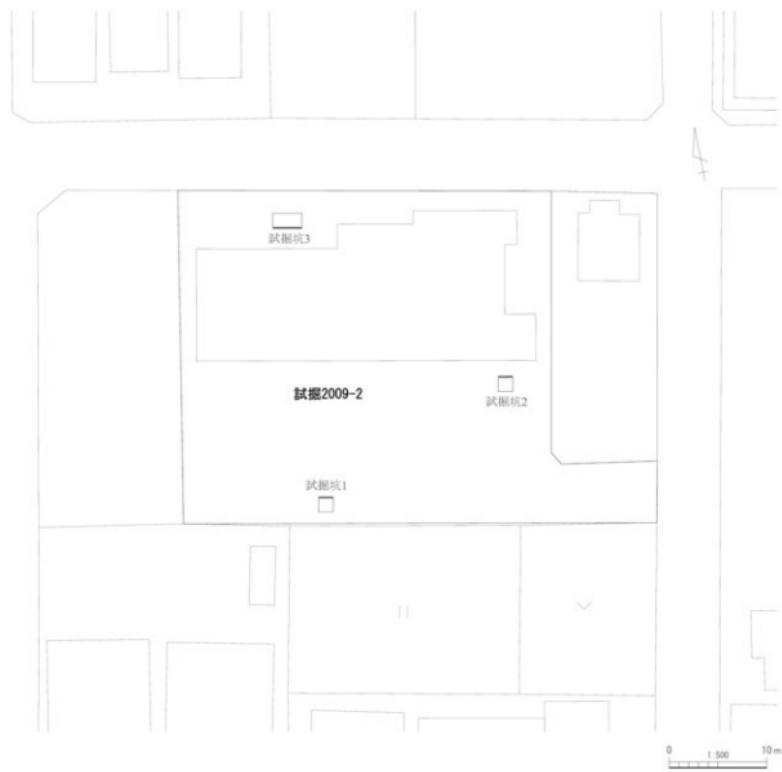


Fig.9 木船廃寺跡試掘調査 (2)

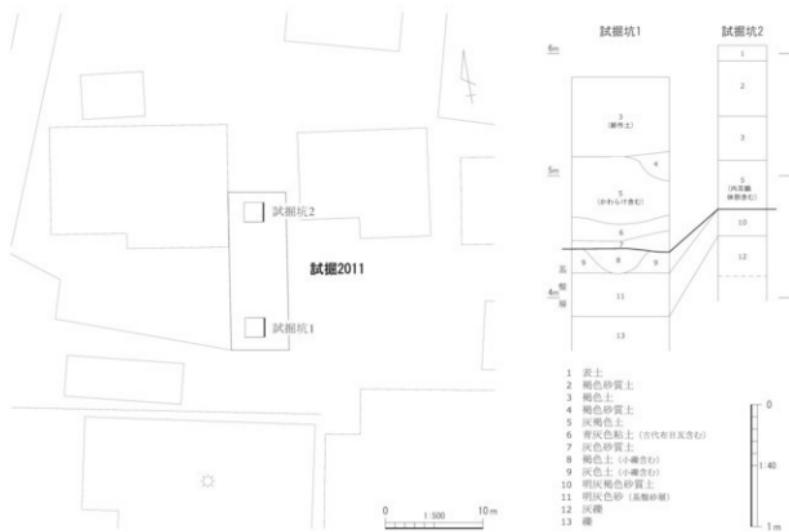
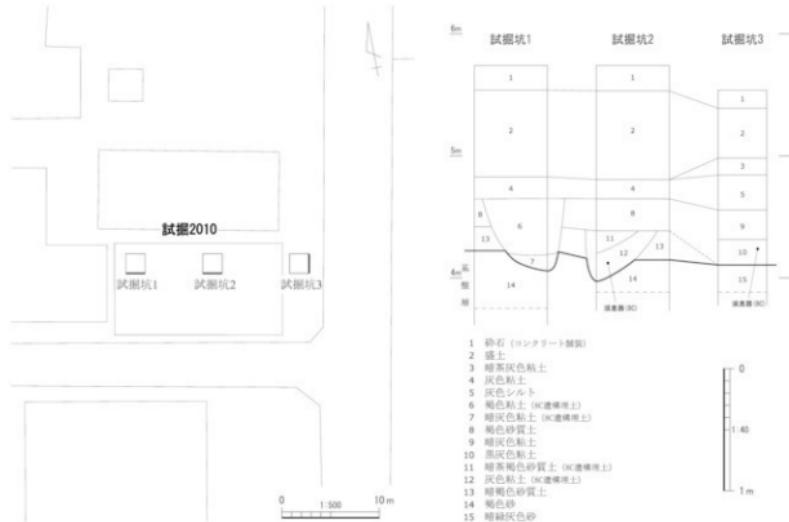


Fig.10 本船廐寺跡試掘調査 (3)

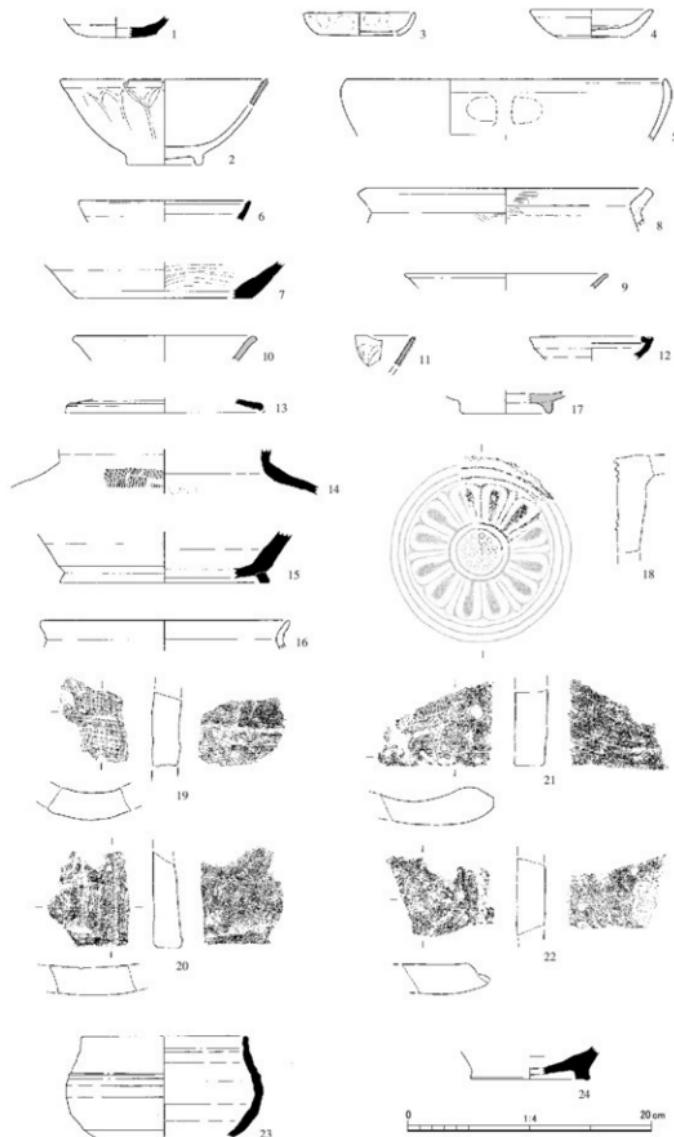


Fig.11 試掘調査出土遺物
1~22: 試掘 2009-1 23~24: 試掘 2010

3 本発掘調査の方法と経過

(1) 調査方法

調査区の設定 本発掘調査を開始するにあたり、調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に合わせた基準線を設定した。国家座標および標高は大蒲村東I遺跡の調査時の情報をもとに、現地に移動した。

表土掘削 調査対象地の盛土および近現代の耕作土は重機（バックホー）を用いて除去した。盛土の高さは部分的に異なるが、現地表から平均1.0mほど、標高にして4.3～4.5m付近まで重機による掘削を行った。

堆積層の掘削 盛土および旧表土などを除去した後、発掘区の壁面を精査して土層堆積状況の把握に努めた。1～3トレンチとも、調査区の東側は中世以降に深く掘削されており、包含層である黒灰色粘土（基本土層3層）を人力で撤去して基盤層（青灰色シルト層）の上面を確認した。なお、検出面の標高が4.2m以下になると湧水がみられるようになり、作業に支障があった。

いっぽう、調査区の西側は古代瓦を含む褐色シルト層（基本土層4a層）や暗褐色シルト層（基本土層4b層）が堆積しており、その上面を覆う淡橙灰色シルト層（基本土層2a層）を人力で撤去して埋没している遺物の確認に務めた。

遺構検出・精査 遺構の検出には鍬簾を用いた。調査区にみられる堆積土は全体的に砂質が強く、遺構検出作業は比較的容易であった。遺構内の精査については、移植ゴテ、竹ベラを用い掘り下げを行った。

遺構測量 遺構の測量は主にトータルステーションを用いた。瓦集積の出土状態の記録は、調査期間短縮のため、出土状態の写真画像編集による図化を行った。土層断面図は縮尺20分の1で作成した。

写真撮影 写真撮影には基本的に銀塩フィルムを用いた。銀塩フィルムによる写真撮影は、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムの双方を用い、6×7判を主体に、部分的に4×5判を使用した。また35mm判もカラーリバーサルフィルムに限り、補足的に用いた。



Fig.12 1トレンチ調査状況



Fig.13 2トレンチ調査状況

(2) 調査経過

発掘調査 現地調査は2010年8月16日から8月31日にかけて実施した。各トレントの調査期間は以下のとおりである。1トレント：8月16日～17日、2トレント：8月18日～20日、3トレント：8月23日～31日、4トレント：8月31日。

発掘調査区は、開発計画（建物の基礎部分）に合わせ、3箇所のトレント（1～3トレント）を基本とした。調査区は便宜的に調査順に合わせ南から北に向かって1～3トレントと名付けた。1トレントの調査によって、古代瓦を大量に含む溝（SD01）が確認できたため、その延長方向にある北側部分を2トレントと接続するよう拡張して調査を行った。同様に2トレントでは瓦集積（SX01）を確認したため、3トレントと接合する拡張区を設け、集積の広がりを把握するように努めた。3トレントでは、北側に向かって基盤層が低く落ち込む状況が確認でき、瓦集積はほぼ調査区内に収まることが明確になった。

現地説明会 2トレントから3トレントにかけて瓦集積SX01を検出し、古代寺院の存在が明確になった。この調査成果を受け、8月27日に調査内容を中心とした現地の報道公開を行った。また、現地説明会は8月29日（日）に実施し、279名にのぼる市民の参加を得た。

調査の完了 現地説明会の終了後、瓦集積SX01、および区画溝SD01出土遺物の取り上げを行った。SX01は瓦の集中度が高く、遺物取り上げ作業は難渋した。また、調査撤収作業と平行して、区画溝の南側延長部分を確認するために4トレントを設定し、部分的な精査を行った。大量の出土遺物に悩まされた発掘調査であったが、8月31日には補足調査を含めた現地調査を完了した。

整理作業 整理作業は、発掘調査の終了後から2011年3月まで実施した。調査終了直後に集計した遺物量は、収蔵用コンテナ（60×44×16cm）103箱分であり、洗浄、仕分け作業といった基礎作業から難航した。整理作業の過程では、出土遺物全点を観察し、遺存部分が大きい個体については製作技法などにかかる集計を実施した。また、関連遺物として1954年に出土した資料についても統一的見地で資料化を行い、本書に掲載した。

今回の調査で得られた資料数は調査規模に比べて膨大であったが、出土遺物の全体はほぼ把握でき、契約期間内に整理作業を完遂することができた。



Fig.14 SX01 調査状況



Fig.15 現地説明会

第2章 検出遺構

1 検出遺構の概要

調査地には高位面と低位面の違いが認められる。低位面は調査区の東側や北側に広がっており、古代の遺構は存在しない。高位面は調査区の南西側に認められ、古代瓦の集積 SX01 が検出できた。瓦集積中の遺物は遺存状態がよく、近隣地に建物があったことを示唆している。高位面と低位面の境界付近には鎌倉時代の区画溝 SD01 があり、この遺構から西側では古代瓦が大量に出土した。地形と古代瓦の埋没状況から、SD01 は寺域の境界を反映していると想定できる。

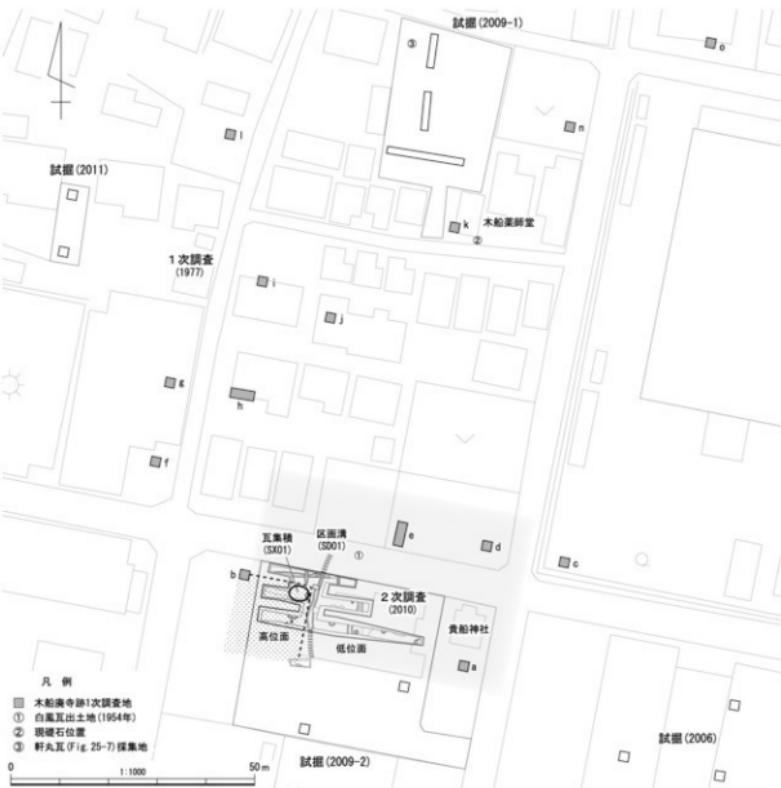


Fig.16 木船廃寺跡 2次調査地の詳細

2 検出遺構の詳細

(1) 基本層位と遺構検出面

木船廃寺跡の基本層位はFig.18に示す。今回の調査区では、低位面と高位面の違いが確認できた。低位面には鎌倉時代の遺物包含層である黒灰色粘土層（3層）が、高位面には古代の遺物包含層および遺構検出面である褐色シルト（4層）が堆積している。低位面は調査区の東側もしくは北側に認められ、基盤層である緑灰色砂（5層）の直上が古代面に相当する。

(2) 瓦集積（SX01）

SX01は高位面の北東隅において検出した古代瓦の集積である。東西4m、南北2.5mほどの範囲で古代瓦が集中的に出土した。南側は擾乱坑によって破壊されており、集積の正確な広がりは不明である。瓦は数枚が折り重なっている状態が認められた。また、瓦集積の下層には土坑（SK07）が1基検出できた。SK07の埋土には古代瓦が特に集中的に出土した。瓦の出土状態はSX01と不可分な状態であり、瓦集積と一緒に土坑内にも瓦が廃棄されたものと考えられる。SX01からはFig.35～43（6～61）の遺物が出土した。SX01出土遺物は古代のものに限られる。集積の形成時期は奈良時代とみてよいだろう。

SX01出土遺物には、後述する区画溝SD01出土遺物と比べると遺存部分が大きい個体が目立つ。完形に復元できる平瓦も数例含まれることからも、SX01の近辺に古代寺院の何らかの堂宇があつた可能性が指摘できる。

(3) 区画溝（SD01）

低位面と高位面の境界に合わせて、幅1.5m、深さ0.3mほどの溝が総延長11mほどにわたって確認できた。断面形状は緩やかなV字形を呈している。SD01内からは大量の古代瓦が出土した。溝内の瓦は、SX01出土遺物と比べると破片が小さく、近隣地から移動して溝内にもたらされたものと考えられる。SD01の西側の高位面に古代寺院が想定できる所以でもある。SD01からはFig.44～49（62～135）の遺物が出土した。瓦は古代のものであるが、土器には鎌倉時代の山茶碗や山皿が含まれる。区画溝の形成時期は鎌倉時代（13世紀）と捉えられる。

地形と古代瓦の埋没状況から、SD01は鎌倉時代になって、寺域の境界を反映した位置に掘削されたと想定できる。

(4) その他の遺構

高位面で検出できたSK05、SP01・02は古代の遺構の可能性がある。低位面の遺構は、鎌倉時代もしくはそれ以降の時期のものが大半とみられる。とくに3トレンチで検出したSD04～06は、遺構埋土の状態がSD01と酷似することから、鎌倉時代の遺構と捉えられる。なお、古代の遺物が出土した遺構としては、1トレンチのSK02やSK04などがあげられる。

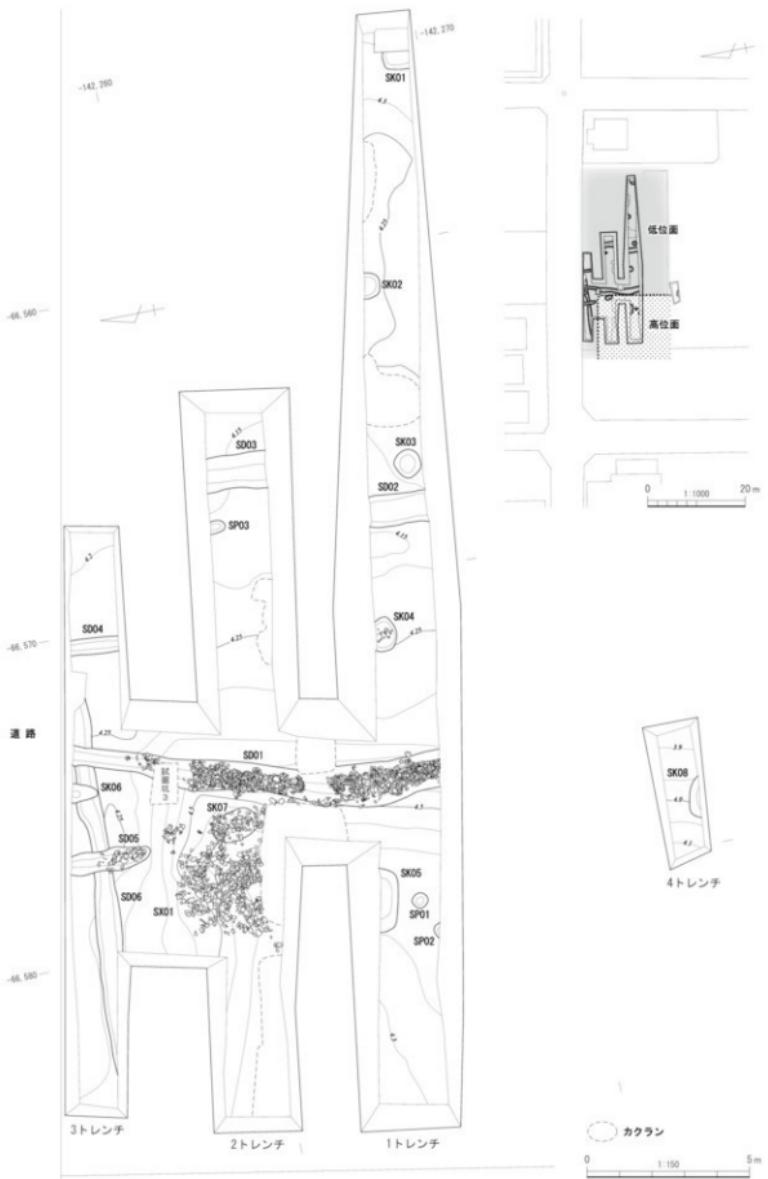


Fig.17 検出遺構

2 検出遺構の詳細

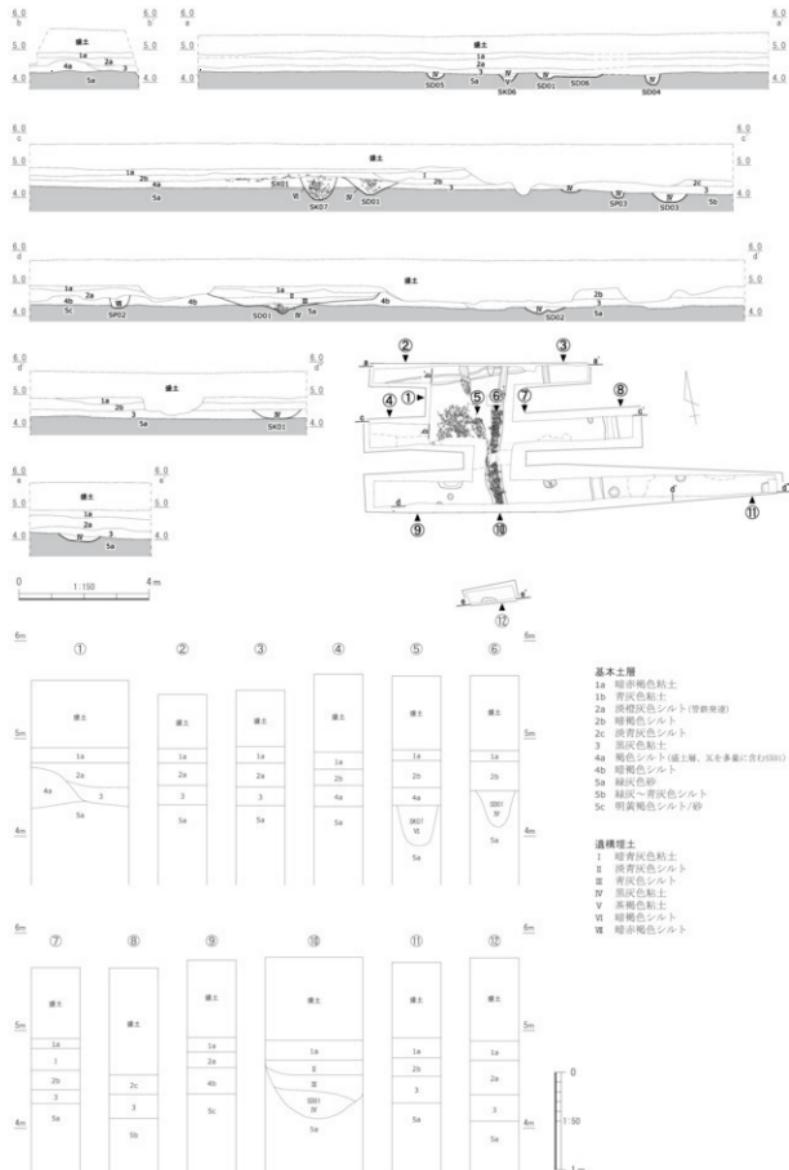


Fig.18 土層断面



Fig.19 主要遺物出土状態

2 検出遺構の詳細

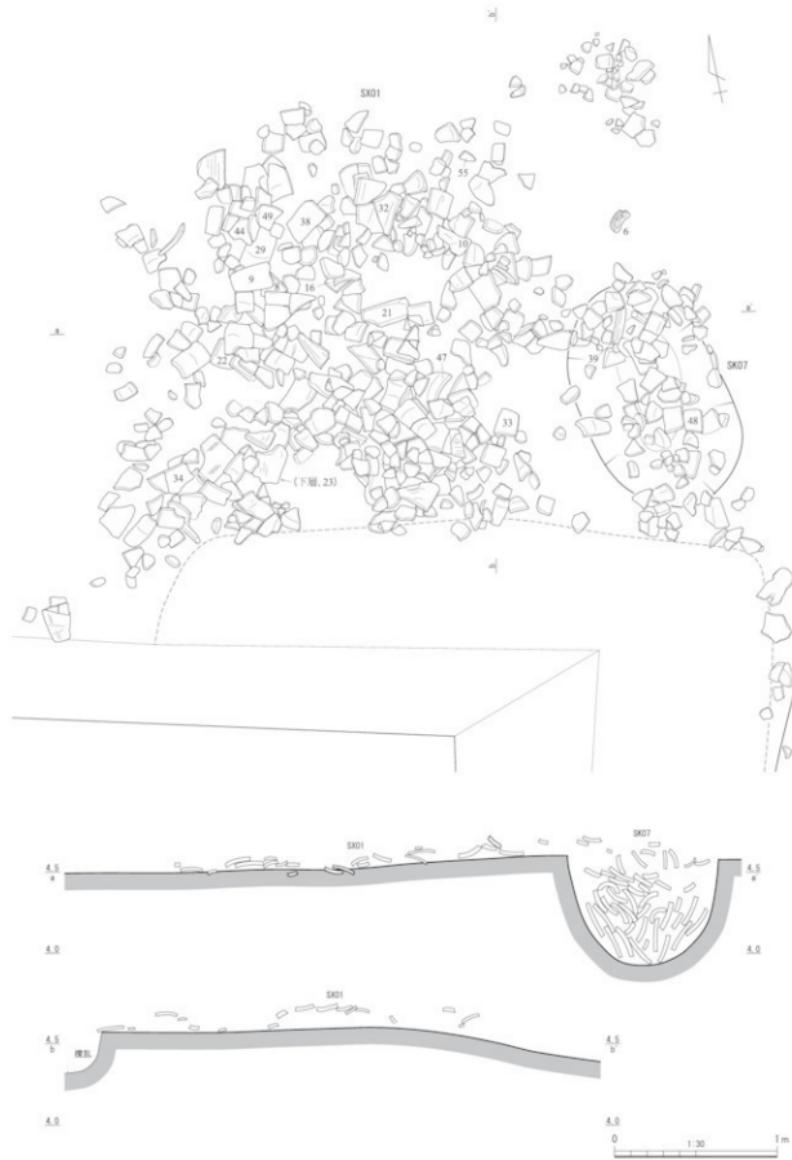


Fig.20 SX01 詳細

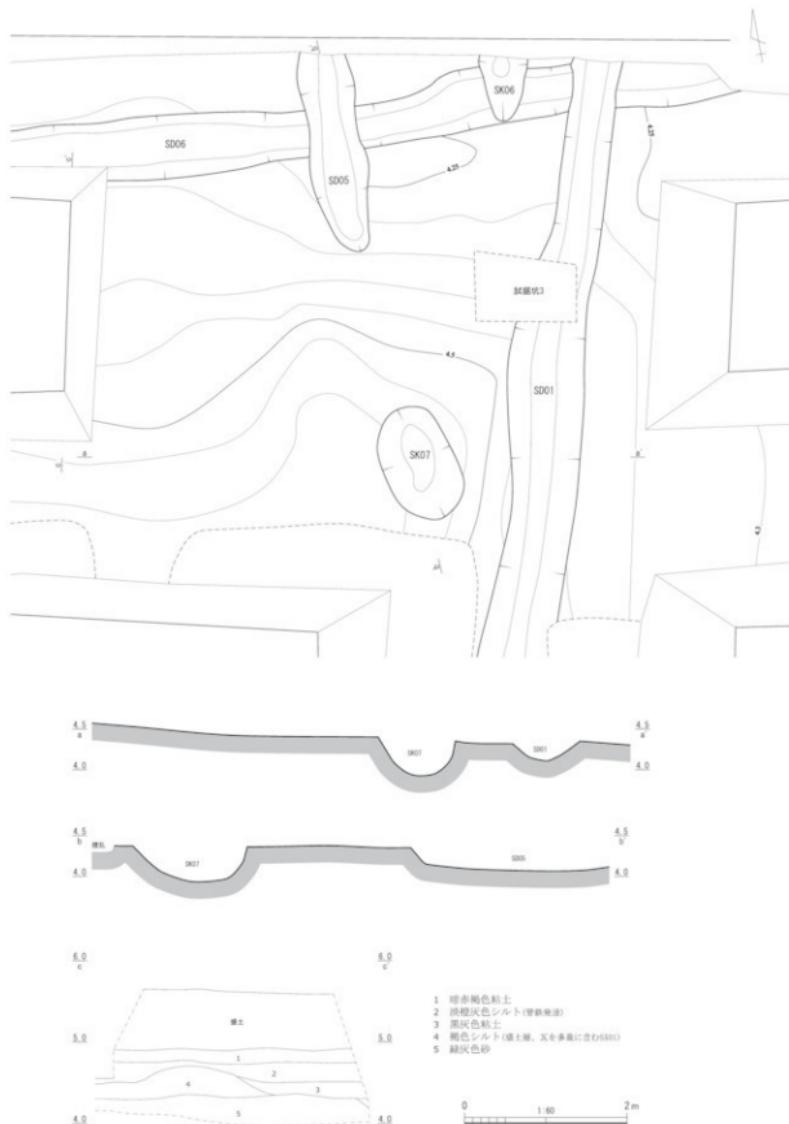


Fig.21 SX01 完掘状況

2 検出遺構の詳細

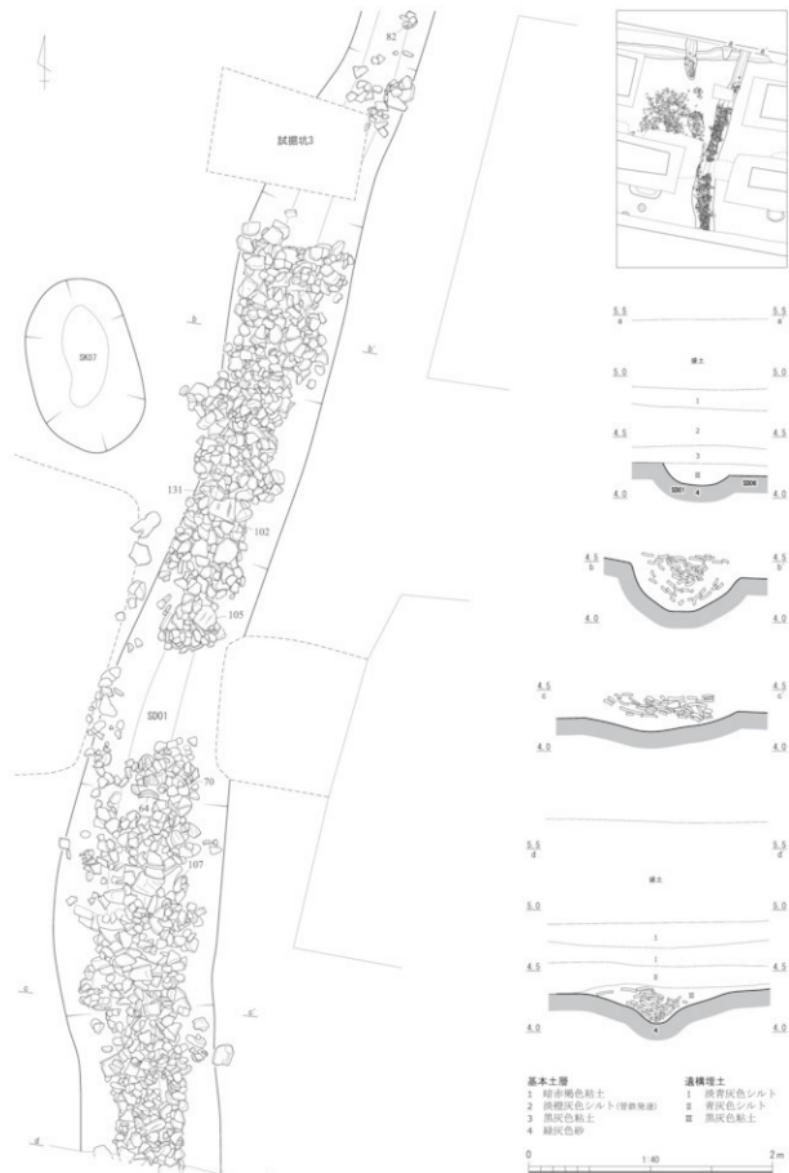


Fig.22 SD01 詳細

第3章 出土遺物

1 出土瓦の概要

今回の調査によって、木船庵寺にかかる古代瓦の新知見が数多く得られた。新たに確認された軒丸瓦も複数あり、軒平瓦は今回の調査によって初めて事例が確認できた。また、丸瓦、平瓦についても、製作技法にかかる情報が明らかにできただけでなく、統計的な分析も可能になった。これら出土瓦の詳細を紹介するにあたり、まず、既出資料を含めて木船庵寺出土瓦の概要を示しておきたい。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は、既出の4点に加え、表面採集で1点、今回の調査では11点が新たに確認できた。その内容は、大きくA～D類の4種に分類できる。以下、瓦当文の様式順に概要を示す。

軒丸瓦A類 (Fig.24-1～6) 重圈文縁單弁七弁蓮華文軒丸瓦を、本書では軒丸瓦A類と呼ぶ。山田寺式の名称で知られているものである。花弁と子葉の特徴の違いから、A 1類～A 3類の3種に細分できる。なお、A 2類とA 3類はいずれも破片資料であり、正確な弁数は不明である。

A 1類は花弁の輪郭線と間弁が独立しているもの（1～4）、A 2類は花弁の輪郭線が間弁と一緒にるもの（5）、A 3類は花弁の輪郭線が不明瞭なもの（6）である。A 1類の花弁長は4.0cm程度であるが、A 2類の花弁長は3.0cmと非常に小さい。A 3類の花弁長は不明であるが、A 2類と同程度である可能性がある。また、A 1類、A 2類の子葉は扁平な長方形で花弁に稜線をもつが、A 3類の子葉は肉厚で円頭形を呈し花弁には稜線がみられない。なお、周縁は直立縁で三重の圓線をもつことを基本とするが、個体ごとの個性が強い。周縁の圓線はA 1類の中でも差異が認められることから、A 1類についてもさらに細分できる可能性がある。

典型例であるA 1類について詳細を示す。Fig.24-1は1954年出土資料で、直径17.0cm、中房径5.0cmである。周縁は直立縁で三重の圓線をもつ。中房は低く、円形というよりは多角形（七角形）に近い。蓮子の突起は小さく、1+6に配している。外周の連子は不均等である。花弁は肉厚に七弁が表現され、輪郭線がめぐる。子葉の先端は直方形を呈し、花弁の先端から稜線を通してある。間弁の盛り上がりは強い。軒丸瓦A類は瓦当面の下側に偏った位置に丸瓦が接合するため、周縁部上面が突出するという特徴がみられる。

軒丸瓦B類 (Fig.24-7・8、Fig.25-1～6) 素文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦を、本書では軒丸瓦B類と呼ぶ。川原寺式の名称で知られているものである。花弁の立体表現の違いから、B 1類とB 2類の2種に細分できる。

B 1類は花弁の反りが強く立体的に表現されるもの（Fig.24-7・8、Fig.25-1～4）、B 2類は花弁の反りが弱く平面的なもの（Fig.25-5・6）である。双方とも周縁が素文であることを始め、連弁や中房

1 出土瓦の概要

の諸特徴には共通性が高く認められる。

典型例であるB1類について詳細を示す。Fig.24-8は1954年出土資料で、直径19.0cm、中房径6.0cmである。周縁の外面は直立し、内面は斜縁で素文である。中房は円形で突出があり、蓮子は周環をもたない突起で表現され、1+5+10に配している。花弁は影りの深い複弁で弁端は切り込みがなく円く反転している。A類と異なり、丸瓦とは瓦当面の外側に合わせた位置で接合している。

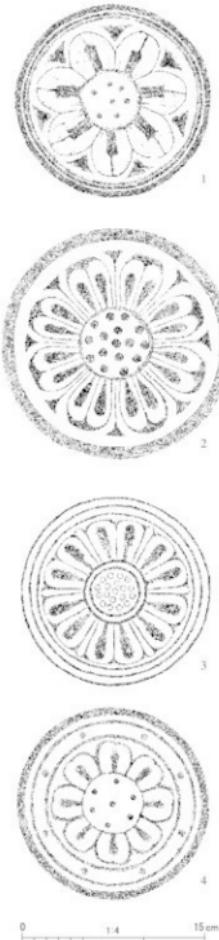


Fig.23 軒丸瓦復元模式図
1:A類 2:B類 3:C類 4:D類

軒丸瓦C類 (Fig.25-7) 重圓文縁（単弁）蓮華文軒丸瓦を、本書では軒丸瓦C類とする。花弁の一つずつに輪郭線が巡ることから、単弁の可能性が高いと判断できるが、複弁の可能性もある。重圓文縁蓮華文軒丸瓦は、当地域では篠場瓦窯出土品を初源例に在地化し、奈良時代に入ると複弁から単弁（細弁）へ変化する様相がうかがえる。

Fig.25-7は、2009年3月に実施した試掘調査（2009-1）において敷地内で採集されたものである。瓦当面の6分の1程度が遺存している。単弁とみれば十二弁（複弁であれば六弁）である可能性が高い。直径15.5cm、中房径5.0cm程度に復元できる。周縁は直立し、三重の圓線が巡る。中房は突出せず、二重の圓線によって区画される。蓮子には周環が表現されるが、連子中心部が小さく同心円状を呈する。連子の配置は不明瞭であるが、1+6+12程度であると推定できる。花弁は反りがない盛り上がりで表現され、花弁の一つずつに輪郭線が巡る。間弁はみられない。輪郭線を追うと二つの花弁が組み合うように配置されていることから、複弁の可能性も残される。

軒丸瓦D類 (Fig.25-8) 外区に珠文列をもつ素文縁単弁蓮華文軒丸瓦であり、本書では軒丸瓦D類とする。様式的には平城宮・京から出土する軒丸瓦に近いが、関連性が高い型式を示すことは難しい。

Fig.25-8は、SD01から出土したものである。瓦当面の4分の1程度が遺存している。花弁は八弁である可能性が高い。直径15.5cm、中房径5.0cm程度に復元できる。周縁は直立し、低く盛り上がった隆帯が巡る。外区には珠文列が巡っているが、間隔が非常に広く全体でも8箇所程度しかないとみられる。中房は突出せず、圓線によって区画される。蓮子は小さく突出している。連子の配置は全く分からぬが、外区の珠文列との均衡を考慮して、1+6程度と推定した。花弁は反りがない盛り上がりで表現され、弁端内側に切り込みを表現した輪郭線によって縁取られている。瓦当面は厚く、4.5cm程度である。

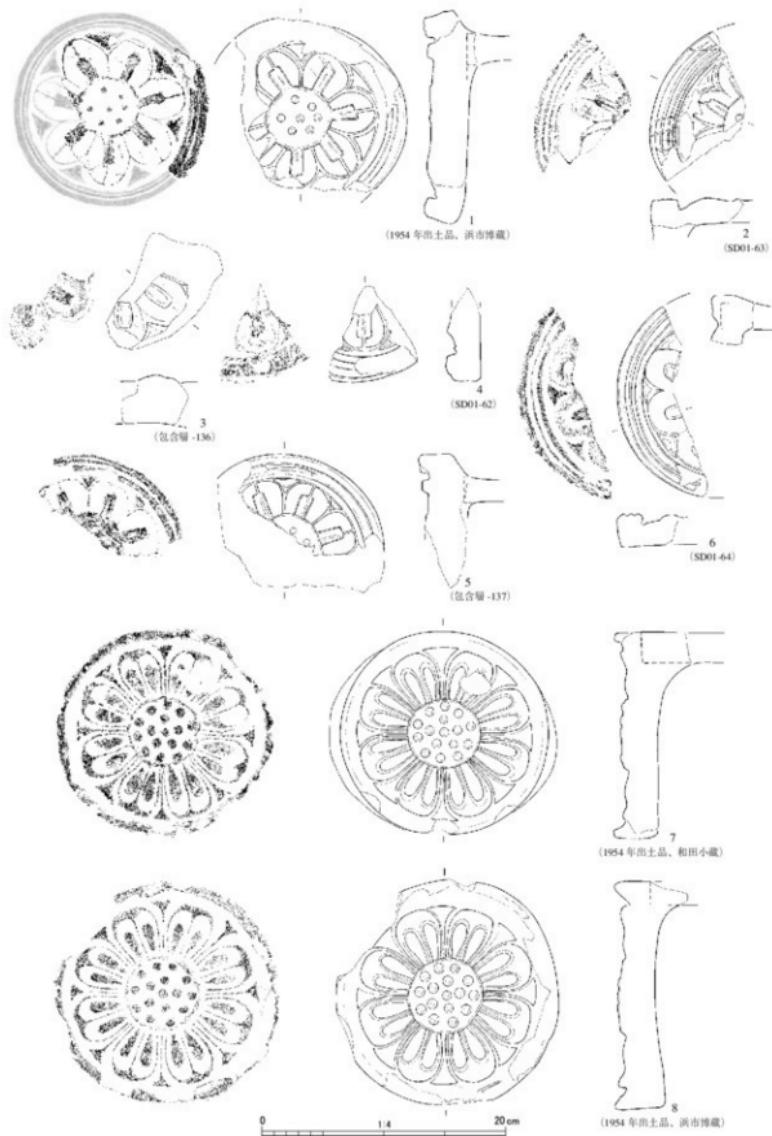


Fig.24 軒丸瓦の諸例（1）

A 1類:1~4 A 2類:5 A 3類:6 B 1類:7~8

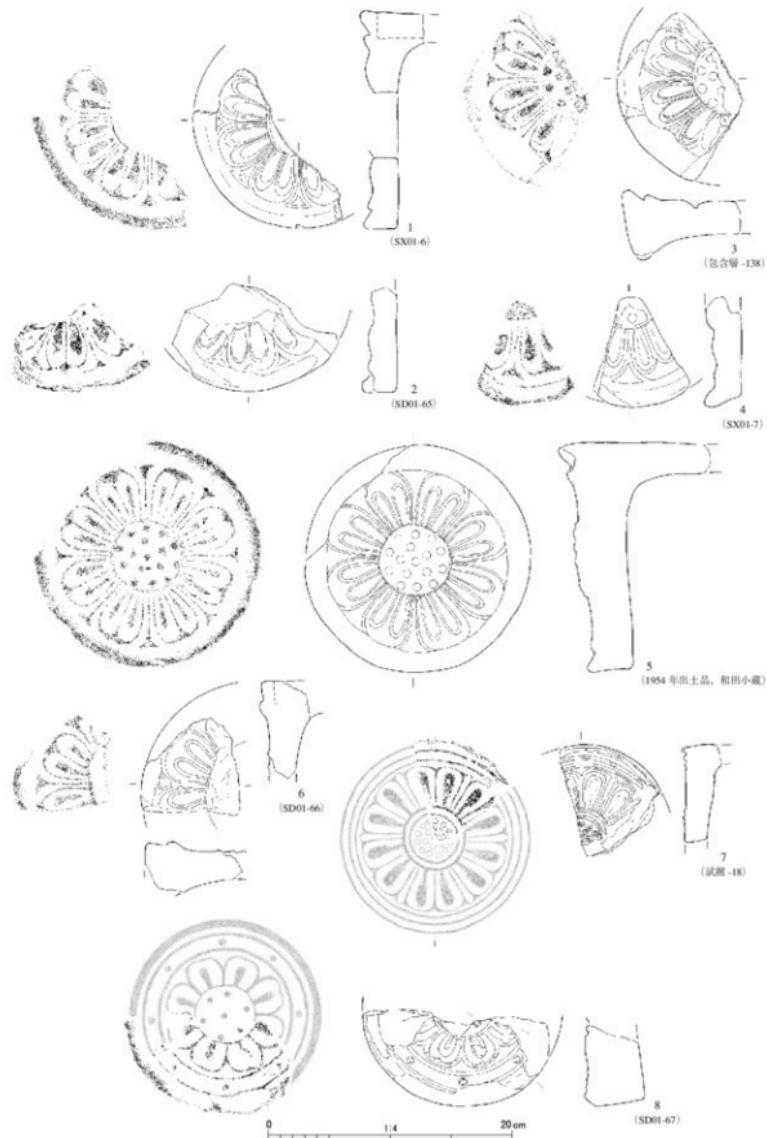


Fig.25 軒丸瓦の諸例（2）
B1類：1～4 B2類：5・6 C類：7 D類：8

(2) 軒平瓦

軒平瓦は從来、木船庵寺からの出土例が知られていなかったが、今回の調査で9点が新たに確認できた。その内容は、大きく3種に分離できる。以下、瓦当文の様式順に概要を示しておきたい。

軒平瓦A類 (Fig.27-1・2) 重弧文軒平瓦を軒平瓦A類とする。直線顎の三重弧文軒平瓦と、段顎の重弧文軒平瓦がある。山田寺式もしくは川原寺式の軒丸瓦と組み合うとみられる。Fig.27-1は三重弧文軒平瓦である。SD01から出土した。直線顎で厚さは2.8cmである。Fig.27-2は重弧文軒平瓦の顎部の破片である。同じくSD01から出土した。段顎をもつ四重弧文軒平瓦と想定できる。

軒平瓦B類 (Fig.27-3～7) 平城宮6663型式（奈文研1996）を忠実に模倣した均整唐草文軒平瓦を、軒平瓦B類とする。今回の調査では合計5点の破片が出土した。Fig.27-3～6がSD01、7が1トレンチ高位面の包含層からの出土品である。いずれも同一範囲によって製作されたものと捉えられ、ほぼ全体形がうかがえる。この軒平瓦は、幅27.8cmに復元できる。顎面をもつ曲線顎である。二重の区界線の内側に流麗な唐草文がみられる。花頭形をなす中心飾りから左右3単位ずつの唐草各単位がある。第1単位の各葉基部は中心飾りの下まで長く伸び、主葉と第1子葉が大きく巻き込む。第2単位も同様に基部が長く区界線に接し、主葉と第1子葉が共に臨区界線に接続している。以上の特徴は、平城宮6663B型式に最も近い。ただし、本例は後出的要素といえる曲線顎IIである点は留意しておきたい。平城宮6663型式の軒平瓦は第二次大極殿の主要瓦であり、平城Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間、745～750年代前半）の所産とされている（奈文研1991）。

軒平瓦C類 (Fig.27-8・9) 遠江国分寺に用いられたS字唐草文軒平瓦を、軒平瓦C類とする。当資料は遠江国分寺創建期の軒平瓦にみられる蕨手唐草文から簡略化が進行した段階のものである（石田1962）。軒平瓦C類は、今回の調査でFig.27-8・9の2点の破片が出土した。双方とも、SD01からの出土品である。

軒平瓦C類は、幅27.0cmに復元できる。瓦当面から緩やかに厚みを減じる直線顎と推定できる。8は中心部左寄り、9は左端の破片で、同范と見て矛盾はない。中心葉は対向するS字文が配されている。左側の文様は連続するS字文が配される。S字文の文様構成、巻き込みの特徴、左側端部のS字文の位置などから、遠江国分寺軒平瓦のD類（平野1991）に相当すると考えられる。D類の軒平瓦は遠江国分寺の創建時期から若干遅れ、周辺伽藍が整備された時期（遠江国分寺Ⅱ期）に位置づけられる。



Fig.26 軒平瓦復元模式図
1: A類 2: B類 3: C類

1 出土瓦の概要

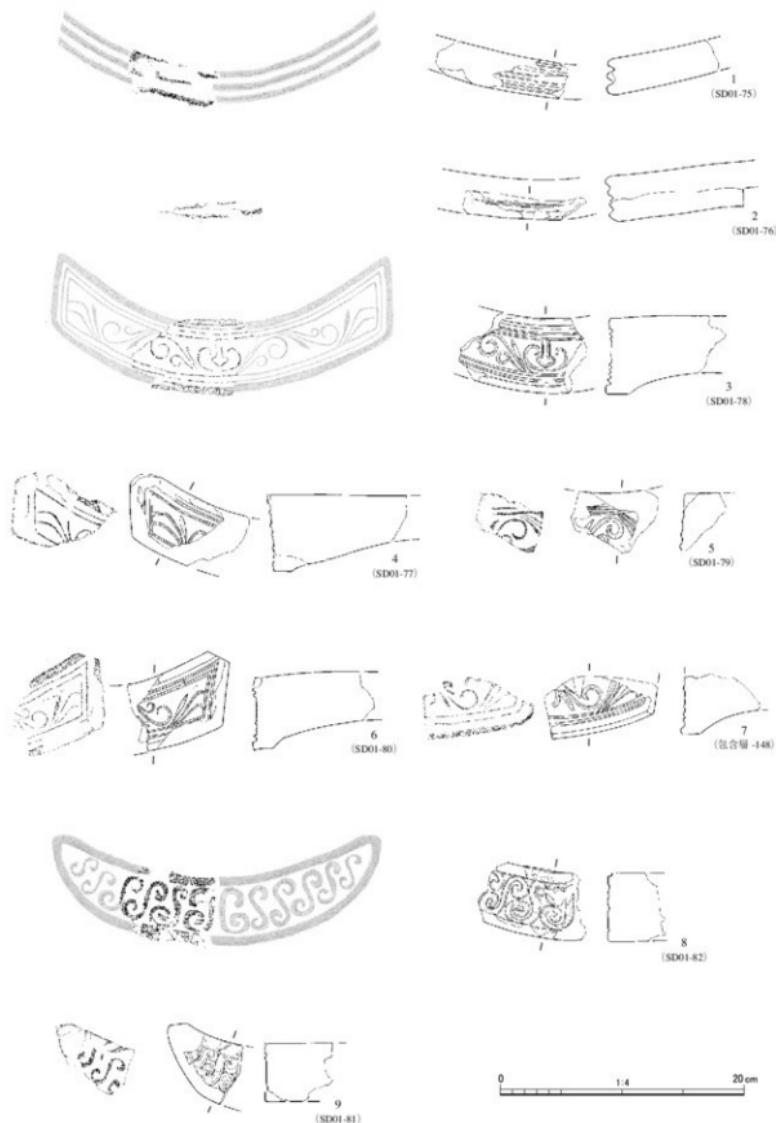


Fig.27 軒平瓦の諸例
A類:1・2 B類:3～7 C類:8・9

(3) 丸瓦

概要 (Fig.29) 木船廃寺から出土した丸瓦には、無段式（行基式）と有段式（玉縁式）の双方が認められる。丸瓦には、凸面にナデ調整がなされ、叩き目が消されているものと、凸面に縄叩き目の痕跡が認められるものの2種がある。双方とも、凹面には布目圧痕が明瞭に残る。

資料全体の比較（一辺10cm以上が遺存する個体を対象）では、凸面に叩き目がみられないものが82%、叩き目がみられるものは18%である。叩き目を残す資料は無段式と有段式の双方に認められ、叩き目の有無は、後述する平瓦のように製作時期の違いを示す指標にはならない。古い段階の丸瓦にも、凸面に叩き目を残すものが含まれるとみてよいだろう。また、丸瓦の下端面には、凹面側の分割裁線とみられる鋭利な工具痕と、凸面側の割れ面との違いが明確に観察できる個体がある（16・73・141・147）。

無段式 無段式と判明する資料全体の比較では、叩き目がみられないものが56%、叩き目がみられるものが44%である。無段式の丸瓦には、5cm程度の幅をもつナデの痕跡が認められるものがある（8）。濡れた皮もしくは布状の道具を用いて横方向に調整を施したものと捉えられよう。また、無段式の丸瓦には、焼成が良好で硬穢なものが含まれる。

丸瓦の中には、平瓦の項目で詳述するように、広端面に目の粗い紐の圧痕（広端面圧痕）が観察できるものがある（18・19・21・71）。平瓦と同様、製作技法の詳細を示す特長として注目できる。広端面圧痕が認められる資料は、無段式か有段式か必ずしも明確でないが、焼成状態や色調などの属性との関連から、無段式に伴うものと想定できる。平瓦における特徴を参考にすると、広端面圧痕をもつ個体は、丸瓦の中でも古い時期、白鳳様式期の所産とみられる。

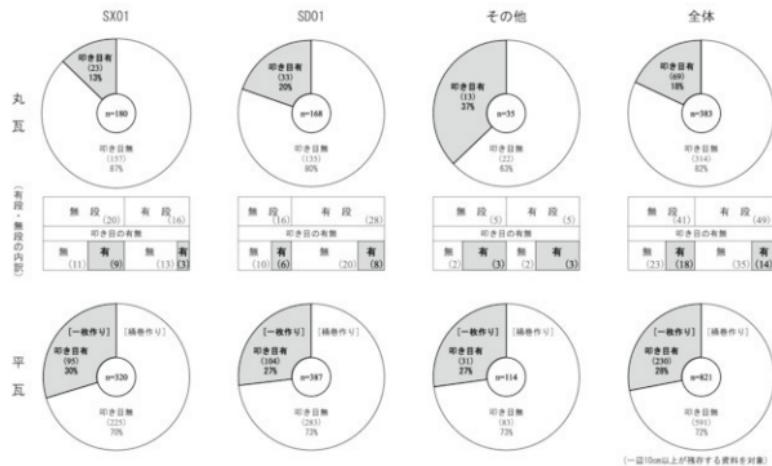


Fig.28 丸瓦と平瓦における製作技法の比率

1 出土瓦の概要

有段式 有段式と判明する資料全体の比較では、叩き目がみられないものが71%、叩き目がみられるものが29%である。有段式の丸瓦には、白灰色を呈し、焼成がやや不良なものがある。ただし、後述する一枚作りの平瓦のように、叩き目が鮮明なものや、胎土に砂粒が多く混入するような個体はみられない。

丸瓦の変遷については、大きく無段式が古相、有段式が新相と判断できる。遠江国分寺では有段式丸瓦が圧倒的多数を占めており、奈良時代後半には有段式が主流となっていたことが分かる。ただし、木船廃寺例における無段式と有段式の占有率は45%と55%であり、平瓦における桶巻作りと一枚作りの比率とは整合しない。木船廃寺の平瓦に一枚作りが導入される以前に、有段式丸瓦が採用されていたことを示すものといえるだろう。

(4) 平 瓦

概 要 木船廃寺から出土した平瓦には、桶巻作りと一枚作りの双方が認められる。後述するように、両者は諸属性に明確な違いがあり、容易に識別ができる。資料全体の比較では、桶巻作り（凸面に繩叩き目がみられないもの）が72%、一枚作り（繩叩き目がみられるもの）が28%である。

桶巻作り 桶巻作りの資料は凹面に明瞭な模骨痕を残し、凸面は丁寧にナデ調整がなされ叩き目が消されている。側端面の整形が比較的丁寧であり、二段階に調整されている個体も多い。色調は灰色もしくは灰白色を呈するが、赤褐色もしくは黄褐色を呈するものも散見できる。

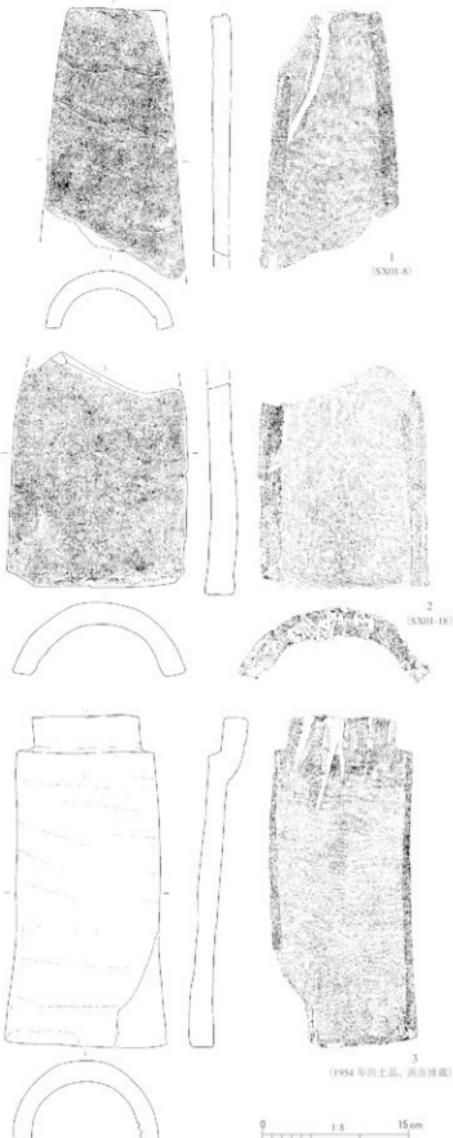


Fig.29 丸瓦の諸例
1:無段式 2:広端面压痕の事例 3:有段式

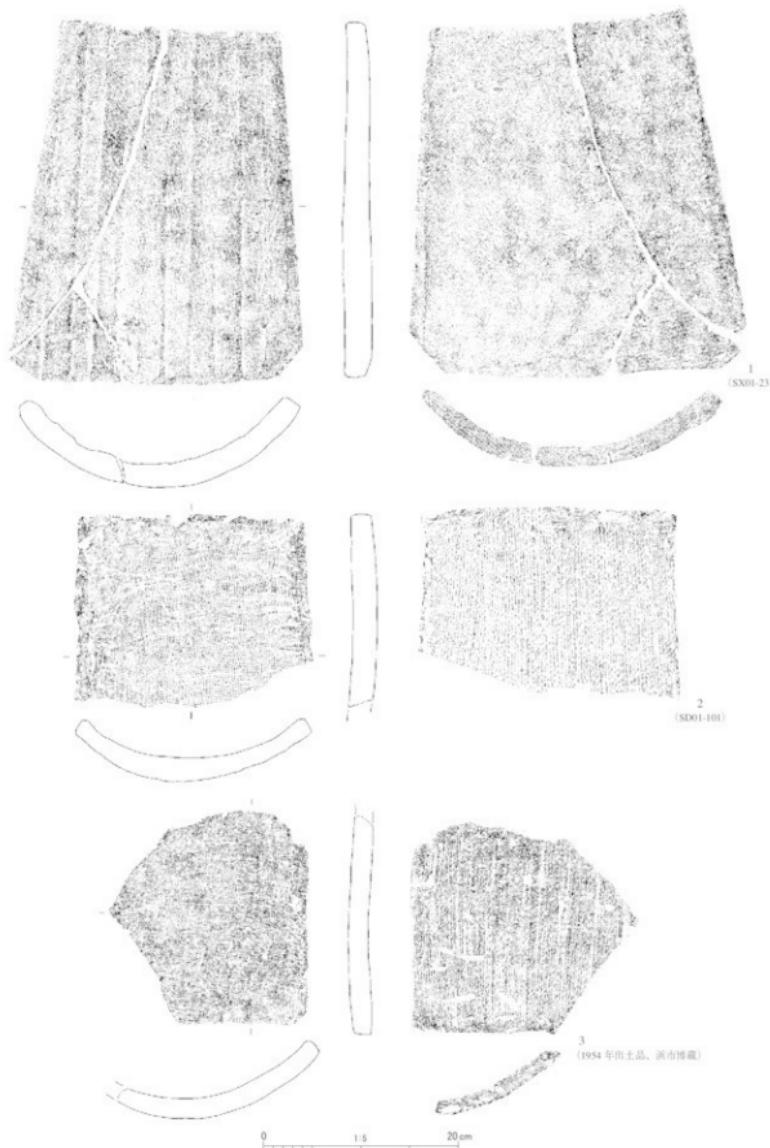


Fig.30 平瓦の諸例

1: 植巻作り 2・3: 一枚作り

1 出土瓦の概要

桶巻作りの平瓦には焼成が良好で、硬穢に焼きあがったものが比較的多く含まれる。なお、模骨痕が明瞭なもので、凸面に叩き目がみられる資料として 42 と 59 があげられる。いずれも例外的な存在である。42 の叩き目は横方向で、再調整の際に入れられた可能性がある。

一枚作り 一枚作りの資料は、凸面にナデ調整が施されず、繩叩き目が明瞭に残る。凹面には明確な模骨痕がみられない。色調は淡灰色や白灰色を呈するものが多く、中には砂粒が非常に多く含まれる個体もある。一枚作りの平瓦は側端面の整形が比較的粗く、布目が残る資料 (51・52・60・116・118) も散見できる。また、凸面にも布目がみられる個体がある (117・156)。一枚作りの端面を覆っていた布が凸面まで達していたことを示す特徴といえるだろう。

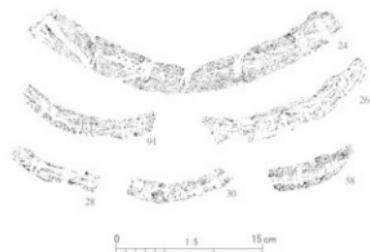


Fig.31 広端面圧痕の詳細



Fig.32 広端面圧痕の原体 (26より作成)

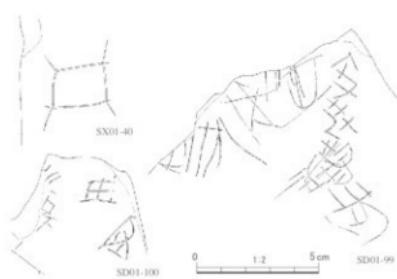


Fig.33 線刻の諸例

広端面圧痕 (Fig.31) 桶巻作りの平瓦には、広端面に目の粗い紐状の圧痕が認められる個体がある。とくに、26 はケズリ調整がなされていないため、その詳細が良好に観察できる。

この圧痕の原体としては、植物の茎などの繊維を束ね横方向に結んだ紐が想定できる (Fig.32)。この圧痕は、先述のとおり丸瓦にもあるが、ともに狭端面にはみられず広端面にのみ認められるので、「広端面圧痕」と呼んでおきたい。広端面圧痕は、分割前の円筒形粘土を製作台から取り外す作業を容易にするため、あらかじめ底部（広端面）に紐を敷いていた痕跡と捉えられる。こうした圧痕は広端面をケズリ調整することによって消失することが多いとみられるが、本船廃寺の平瓦にはケズリ調整が施されているでも圧痕が残っている個体が高頻度で確認できる。丸瓦、平瓦の製作技法をうかがううえ重要な痕跡といえるだろう。

線刻資料 (Fig.33) 桶巻作りの平瓦に、線刻が施された個体が 3 点確認できる。いずれも桶巻作りの平瓦の凸面に鋭利な工具で刻まれたものである。99 は一部に文字が記されている可能性があるが、40 と 100 は記号的なものと捉えられる。なお、99 についても、文字と捉えるには不可解な部分が多く、記号的な線刻が混在しているとみられる。

2 発掘調査出土遺物

(1) 寺院造営以前の遺物 (Fig.34)

遺物包含層や古代の遺構の中から、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が僅ながら出土した。弥生時代後期にかんしては、出土地が近隣に想定できる木船銅鐸と同時代のものであり、古代寺院造営以前の様相をうかがう資料として重要である。

1・2は壺の口縁、3は装飾鉢の口縁である。4はく字壺の口縁である。以上の資料は、形態的特長から弥生時代後期のものと捉えられる。5はS字壺の脚台部である。弥生時代終末期もしくは古墳時代前期に降る可能性がある。

(2) 瓦集積 (SX01) 出土遺物 (Fig.35 ~ 43)

6 ~ 56はSX01から出土した遺物である。軒丸瓦2点、丸瓦15点、平瓦30点、土器3点、鉄器1点を示す。なお、製作技法の比率を検討した瓦の破片数は、丸瓦180点、平瓦320点である。

軒丸瓦は、素文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦（川原寺式、軒丸瓦B類）が2点（6・7）ある。いずれもB1類に分類できるものである。8 ~ 22は丸瓦である。丸瓦には無段式（8 ~ 14）、有段式（15 ~ 17）の双方がある。17の玉縁部は形態的に異質である。丸瓦には広端面圧痕が認められるもの（18・19・21）がある。また、20の底側面には凸面側から入れられた工具痕が残る。

23 ~ 52は平瓦である。23 ~ 42が桶巻作り、44 ~ 52が一枚作りのものである。43は重弧文軒平瓦の可能性があるが、詳細不明品である。桶巻作りの資料には、全体形が判明するもの（23・24・31）や、広端面圧痕が認められるものが含まれる（23 ~ 30・42）。26は広端面にケズリ調整がなされておらず、圧痕が良好にうかがえる。40には記号的な線刻が認められる。42は桶巻作りとみられるが、凸面に横方向の叩き目がみられるものである。一枚作りの平瓦のうち、側面に布目がみられるものに、51・52がある。49は凹面に板状工具でナデ調整がなされている。

SX01に伴う土器・鉄器には、53 ~ 56がある。土器はいずれも8世紀の須恵器で53は坏身、54は短頭壺、55は平瓶もしくは長頸壺である。56は鉄釘である。

57 ~ 61はSK07から出土した遺物である。SK07はSX01の下層において検出できた土坑である。59は凹面に模骨痕をもちながら凸面に叩き目を残す個体である。SK07から出土した平瓦には一枚作りの個体が含まれることから、SX01との時期的な違いを認めてくい。

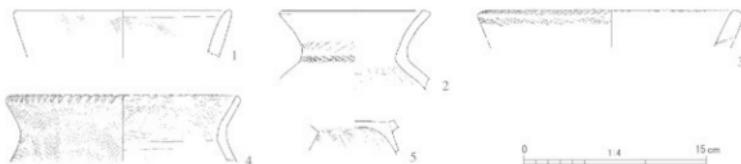


Fig.34 寺院造営以前の出土遺物

(3) 区画溝（SD01）出土遺物（Fig.44～49）

62～135はSD01から出土した遺物である。軒丸瓦6点、丸瓦7点、軒平瓦8点、平瓦36点、埠1点、土器13点、石製品1点、鉄器2点を図示する。なお、製作技法の比率を検討したSD01出土瓦の破片数は、丸瓦168点、平瓦387点である。

62～67は軒丸瓦である。重圓文縁單弁七弁蓮華文軒丸瓦（山田寺式、軒丸瓦A類）が3点（62～64）、素文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦（川原寺式、軒丸瓦B類）が2点（65・66）、素文縁單弁蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦D類）が1点（67）ある。軒丸瓦の細分に従うと、62・63がA1類、64がA3類、65がB1類、66がB2類である。丸瓦（68～74）には広端面圧痕が認められるもの（71）がある。

75～82は軒平瓦である。軒平瓦には、重弧文軒平瓦（軒平瓦A類）が2点（75・76）、均整唐草文軒平瓦（軒平瓦B類）が4点（77～80）、S字唐草文軒平瓦（軒平瓦C類）が2点（81・82）ある。76は段頭の頭の部分が剥離したもので、最下段の瓦当面が遺存している。

83～118は平瓦である。83～100が桶巻作り、101～118が一枚作りのものである。桶巻作りの個体には広端面圧痕が認められるものがある（91～97）。98は桶巻作りとみられるが、凸面に横方向の叩き目がみられるものである。同様の特徴がみられる個体として、SX01から出土した42が知られる。99・100は線刻が確認できる資料である。99には文字が記されている可能性があるが、判読は難しい。一枚作りの平瓦は、SX01出土遺物と比べて遺存状態がよい資料が多い。116の狭端面、117の凸面、118の側面には布目が確認できる。いずれも一枚作りの特徴である。

119は埠である。木船庵寺から出土した埠は本例が唯一である。厚さ4.2cmほどの端部が遺存している。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。

120～135は瓦以外の遺物である。奈良時代の土器（120～124）のほかに、山茶碗（127～129）、山皿（130）、片口鉢（131）、渥美産の壺（132）などが含まれる。13世紀まで降るものがあり、SD01の形成時期をうかがうことができる。133は砂岩製の砥石、134は鉄製の鎌、135は鉄釘とみられる。

(4) その他遺構、包含層出土遺物（Fig.51～53）

136～166は包含層から出土した遺物である。軒丸瓦5点（うち瓦当文様が判明するものは3点）、丸瓦7点、軒平瓦1点、平瓦9点、土器9点を図示する。

軒丸瓦には、重圓文縁單弁七弁蓮華文軒丸瓦（山田寺式、軒丸瓦A類）が2点（136・137）、素文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦（川原寺式、軒丸瓦B類）が1点（138）ある。軒丸瓦の細分では、136・137がA1類、138がB1類に分類できる。軒平瓦は均整唐草文軒平瓦（軒平瓦B類）が1点（148）ある。141～147は丸瓦、149～153が桶巻作りの平瓦、154～157が一枚作りの平瓦である。広端面圧痕がみられるものには150～152がある。156の凸面には布目がみられる。

4トレンチの包含層からは158・159・162～166の土器が出土した。164・165は東近江産の灰釉陶器の皿である。百代寺窯期（11世紀）のものであり、木船庵寺の廃絶時期を示す遺物と捉えられる。

167～170はその他の遺構から出土した遺物である。167・168はSD05から出土した瓦、169はSK02から出土した須恵器の壺、170はSK04から出土した須恵器の箱坏である。

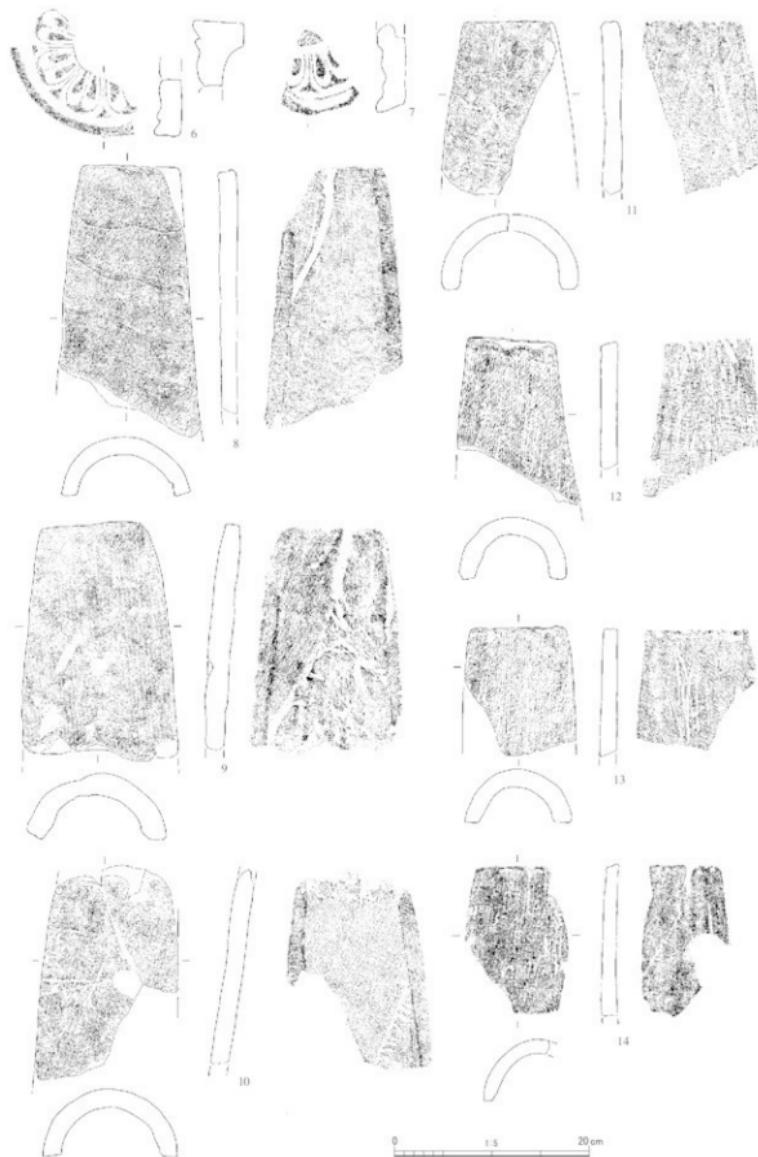


Fig.35 SX01 出土遺物 (1)

2 発掘調査出土遺物

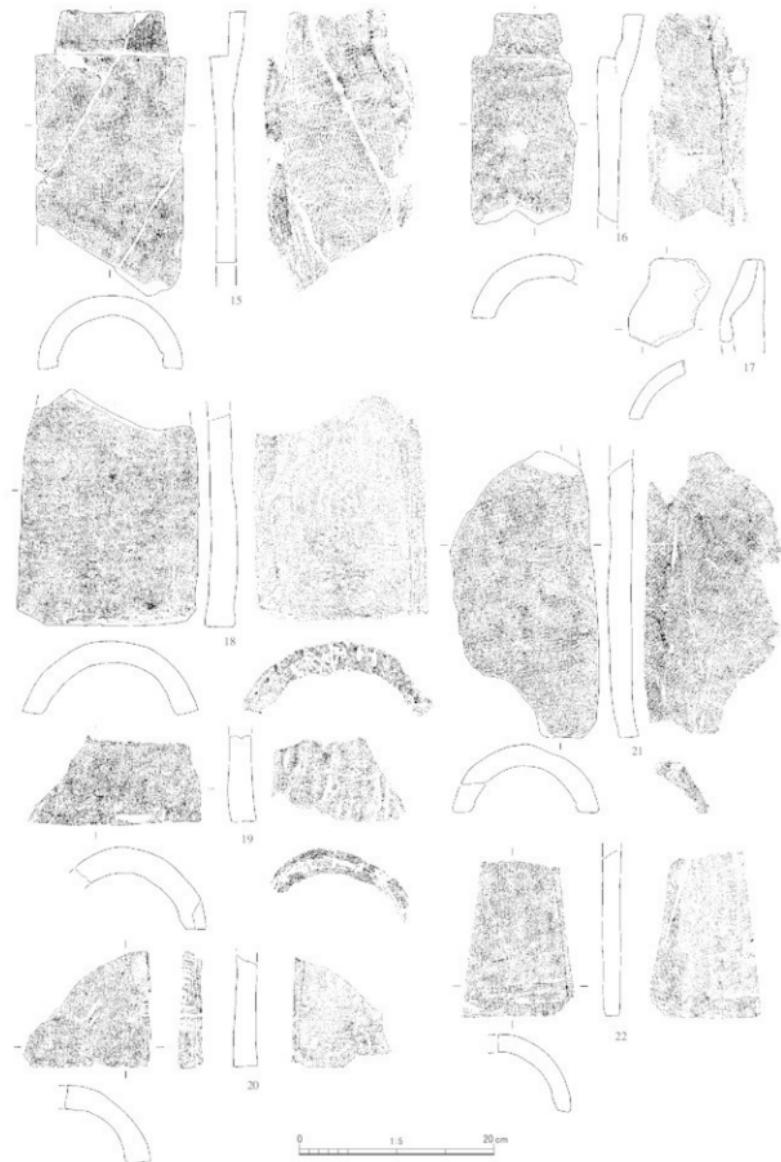


Fig.36 SX01 出土遺物 (2)

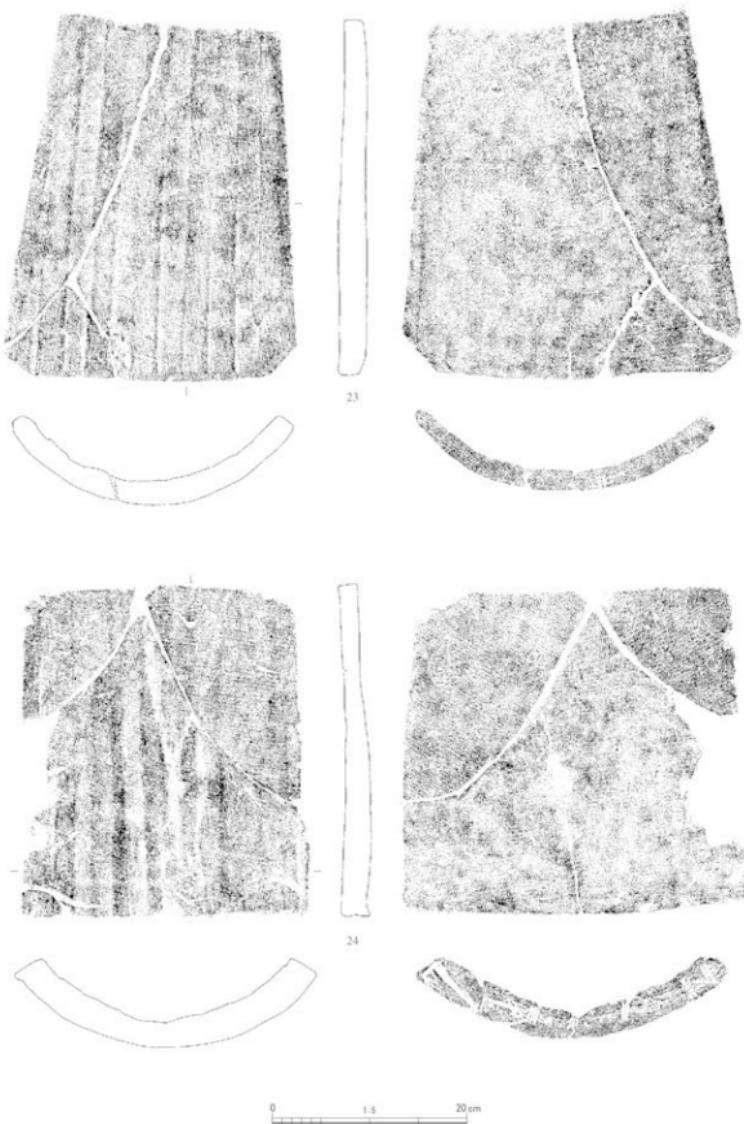


Fig.37 SX01 出土遺物 (3)

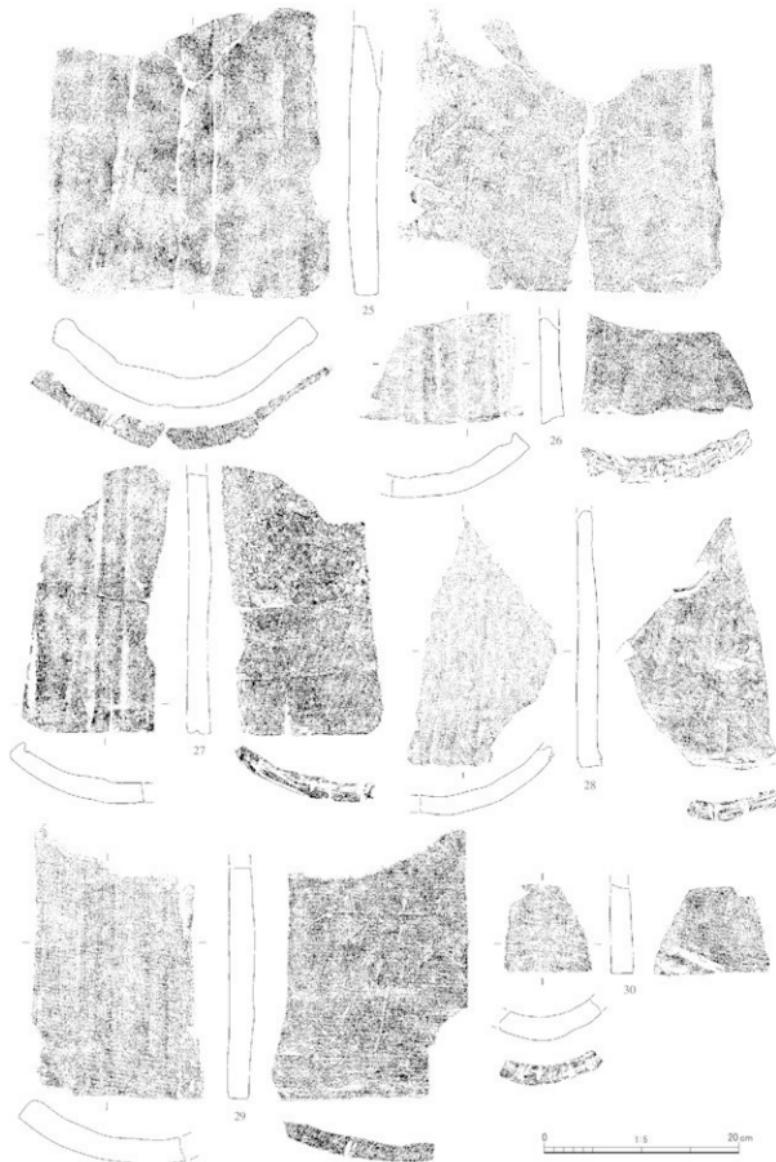


Fig.38 SX01 出土遺物 (4)

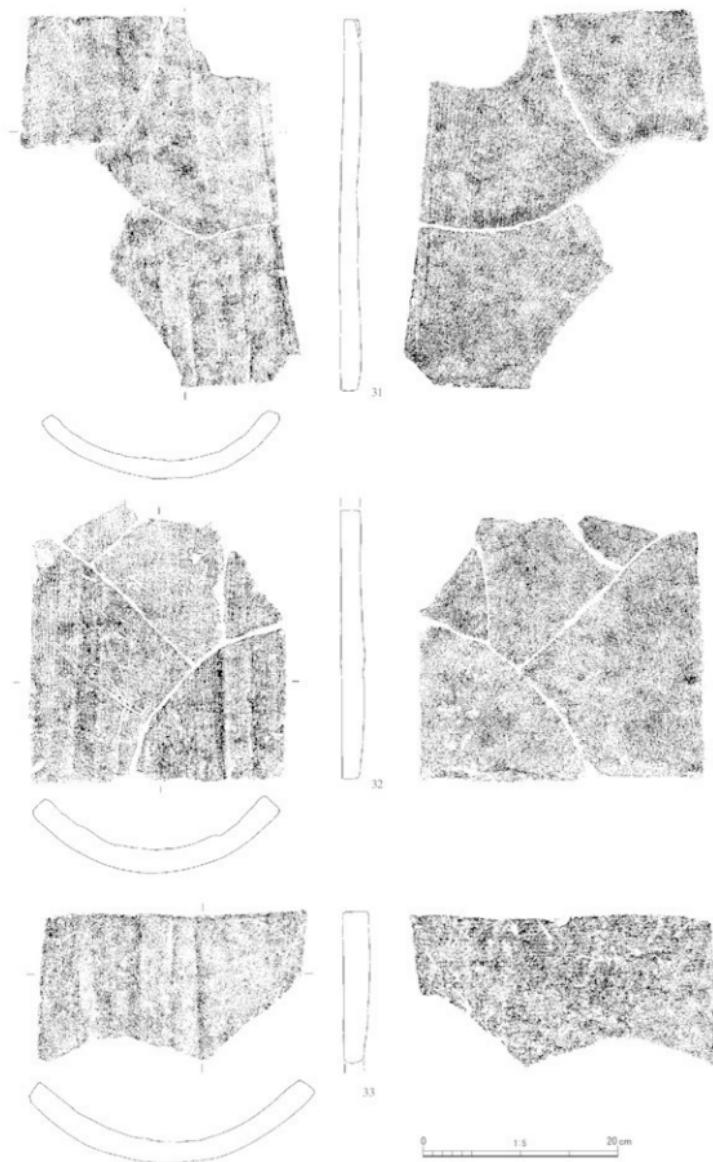


Fig.39 SX01 出土遺物 (5)

2 発掘調査出土遺物

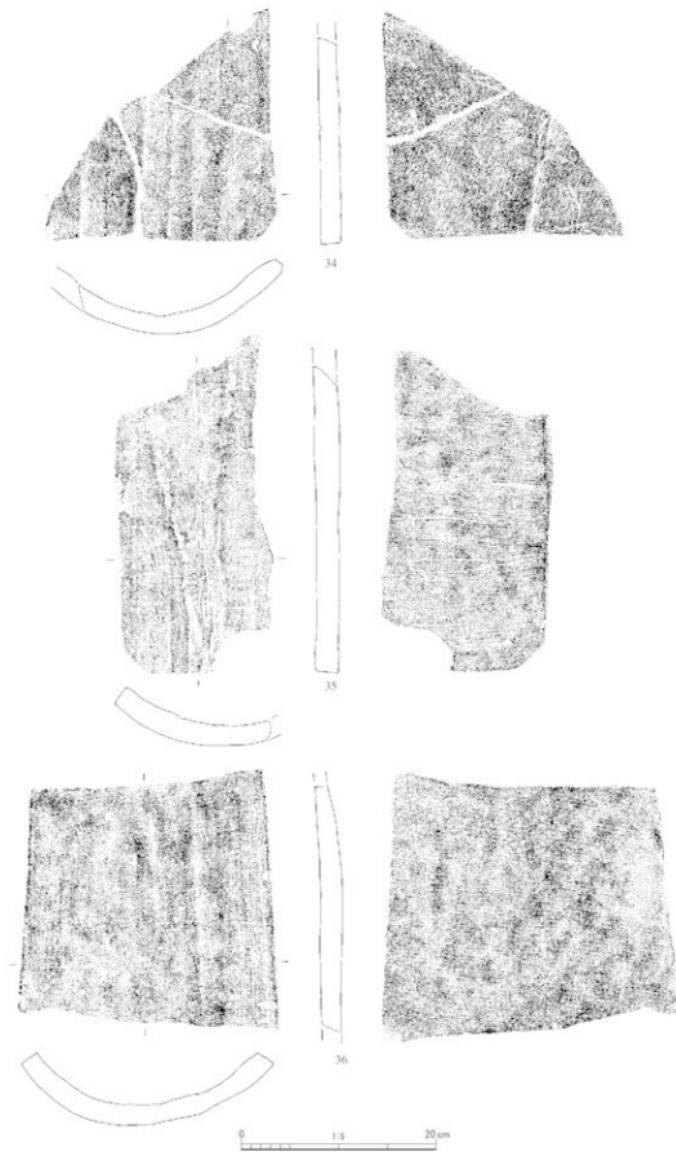


Fig.40 SX01 出土遺物 (6)



Fig.41 SX01 出土遺物 (7)

2 発掘調査出土遺物

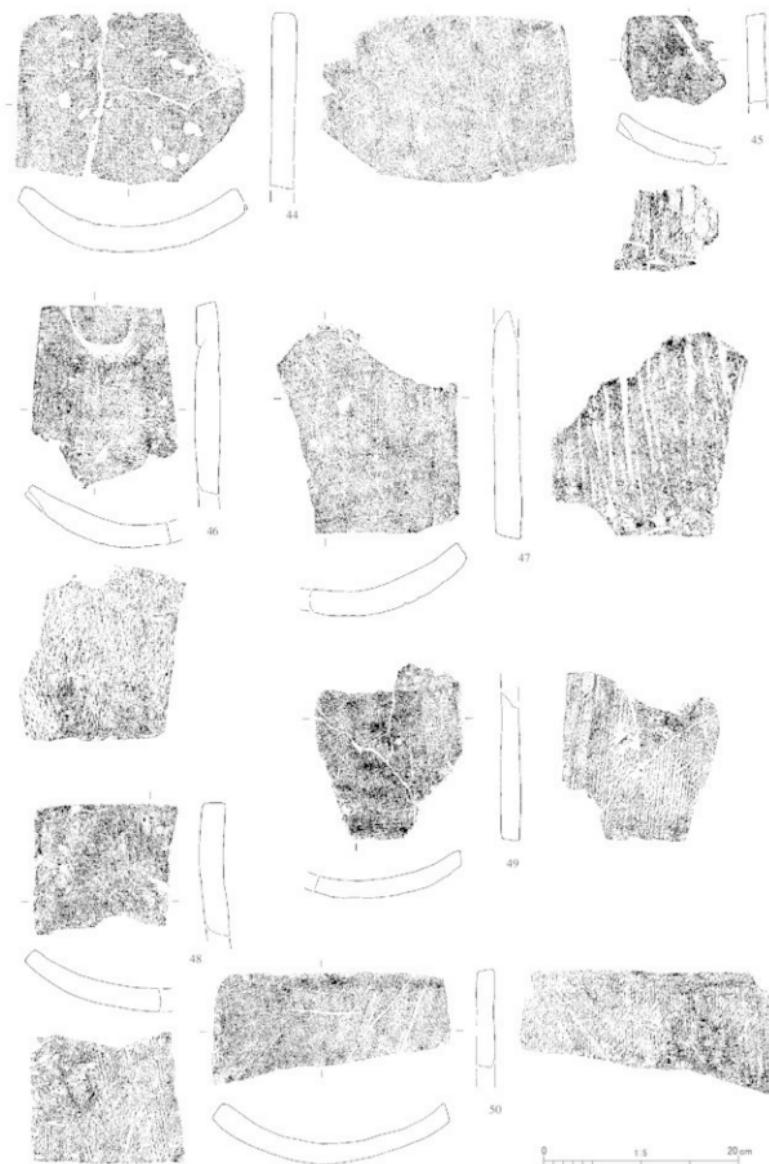


Fig.42 SX01 出土遺物 (8)

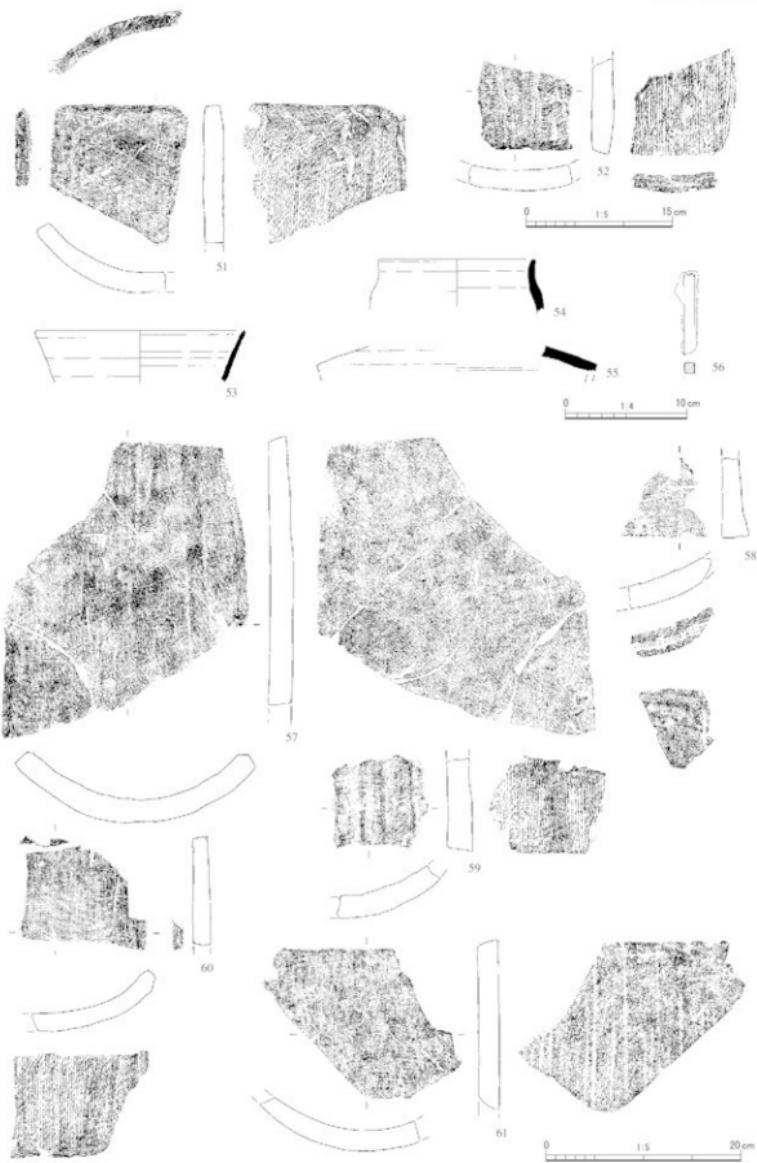


Fig.43 SX01 出土遺物(9)、SK07 出土遺物
51~56; SX01 57~61; SK07

2 発掘調査出土遺物

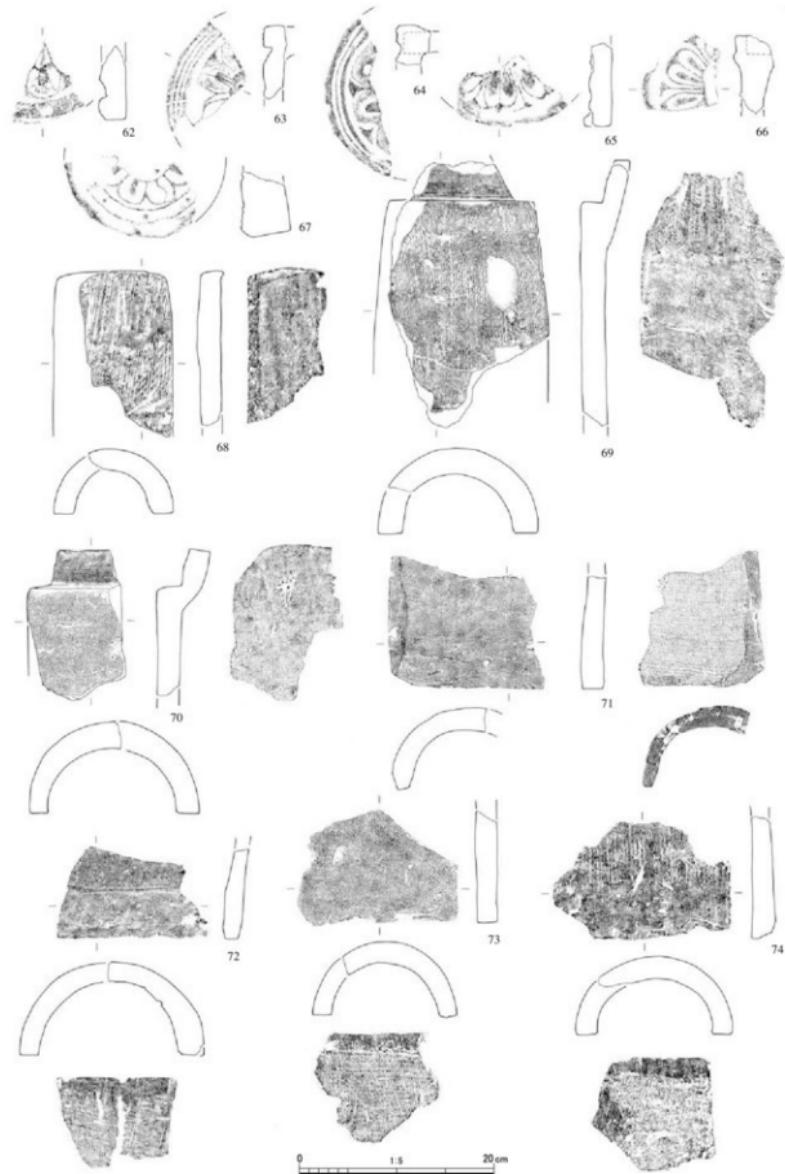


Fig.44 SD01 出土遺物 (1)

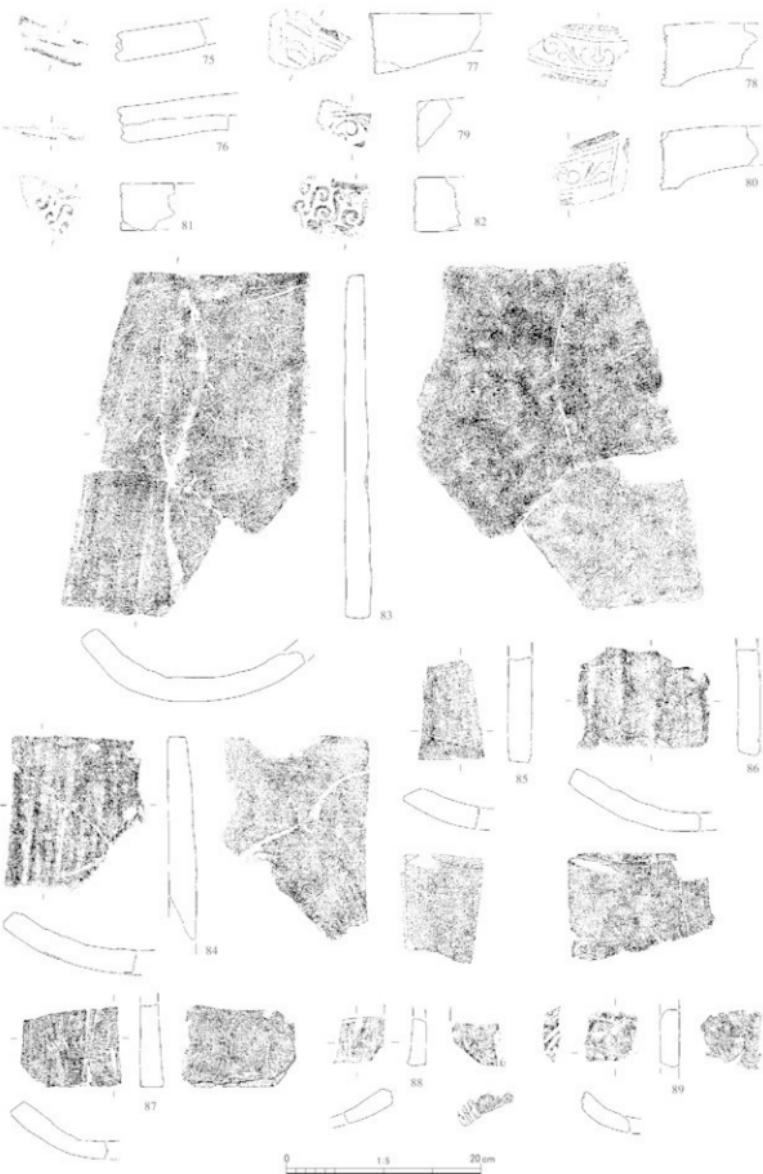


Fig.45 SD01 出土遗物 (2)

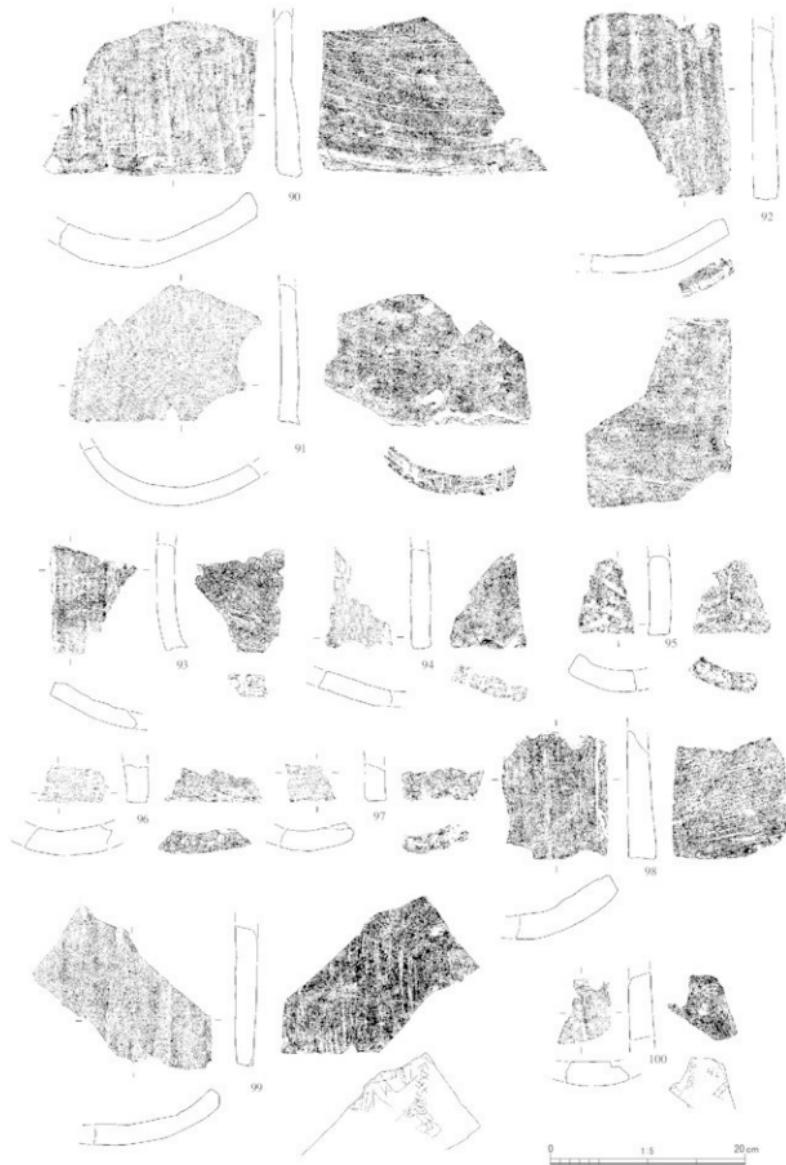


Fig.46 SD01 出土遺物 (3)

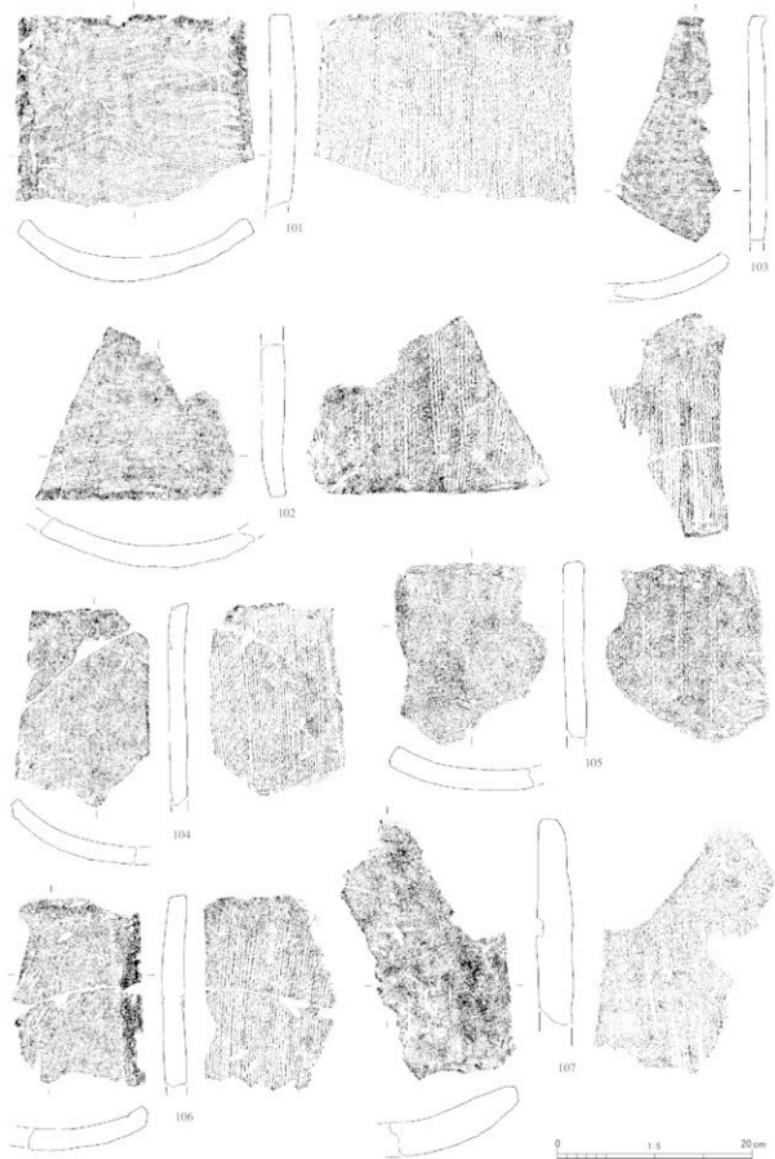


Fig.47 SD01 出土遺物 (4)

2 発掘調査出土遺物

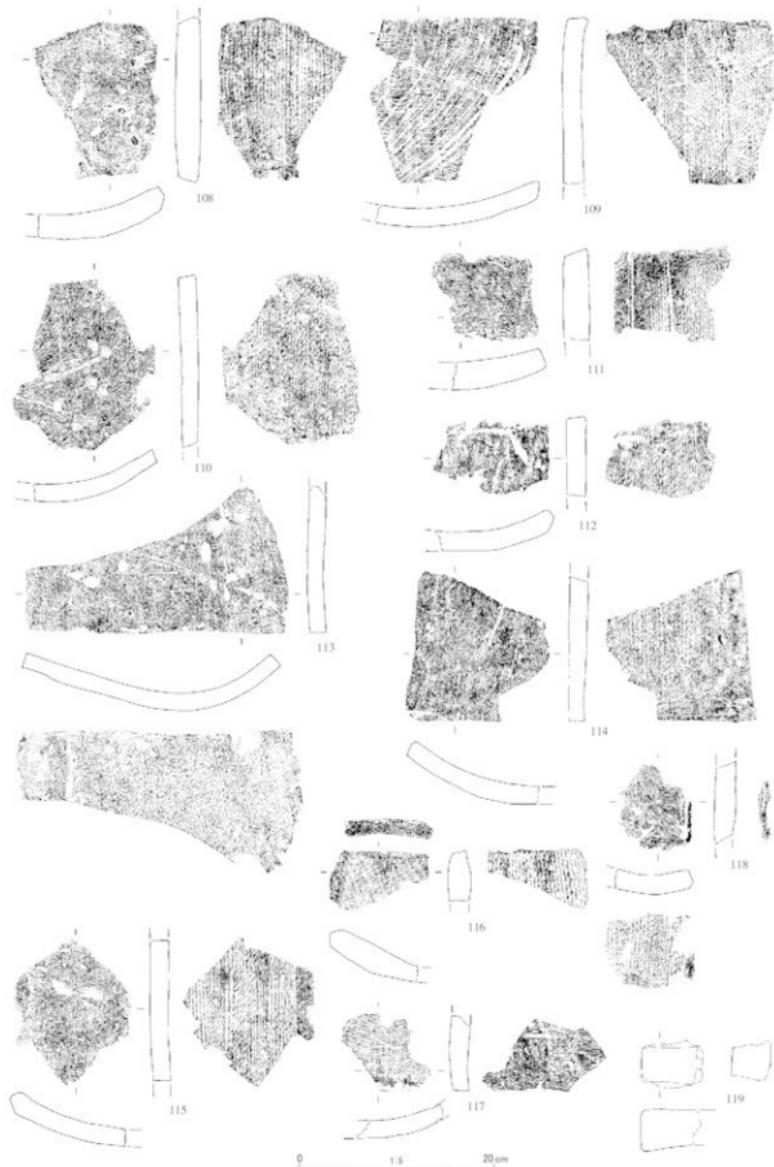


Fig.48 SD01 出土遺物 (5)

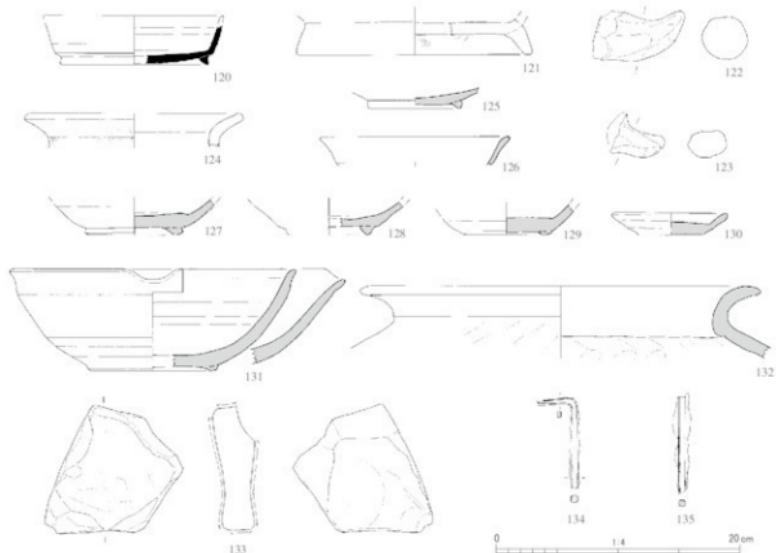


Fig.49 SD01 出土遺物 (6)

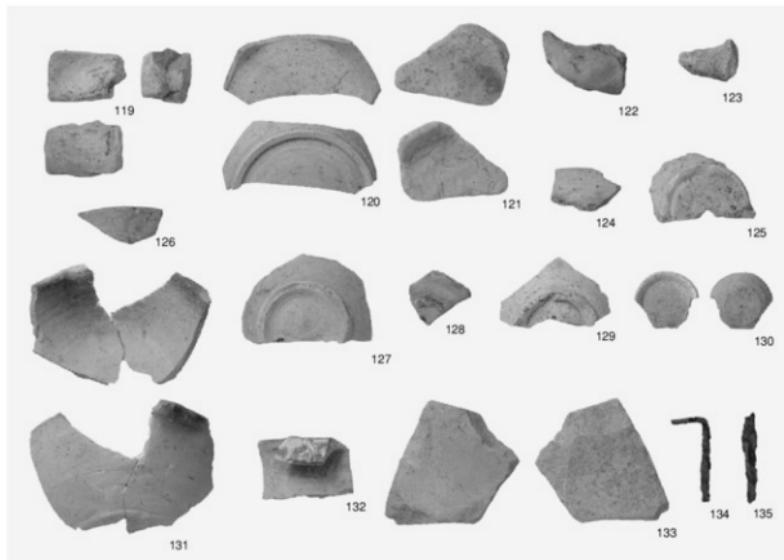


Fig.50 SD01 出土遺物

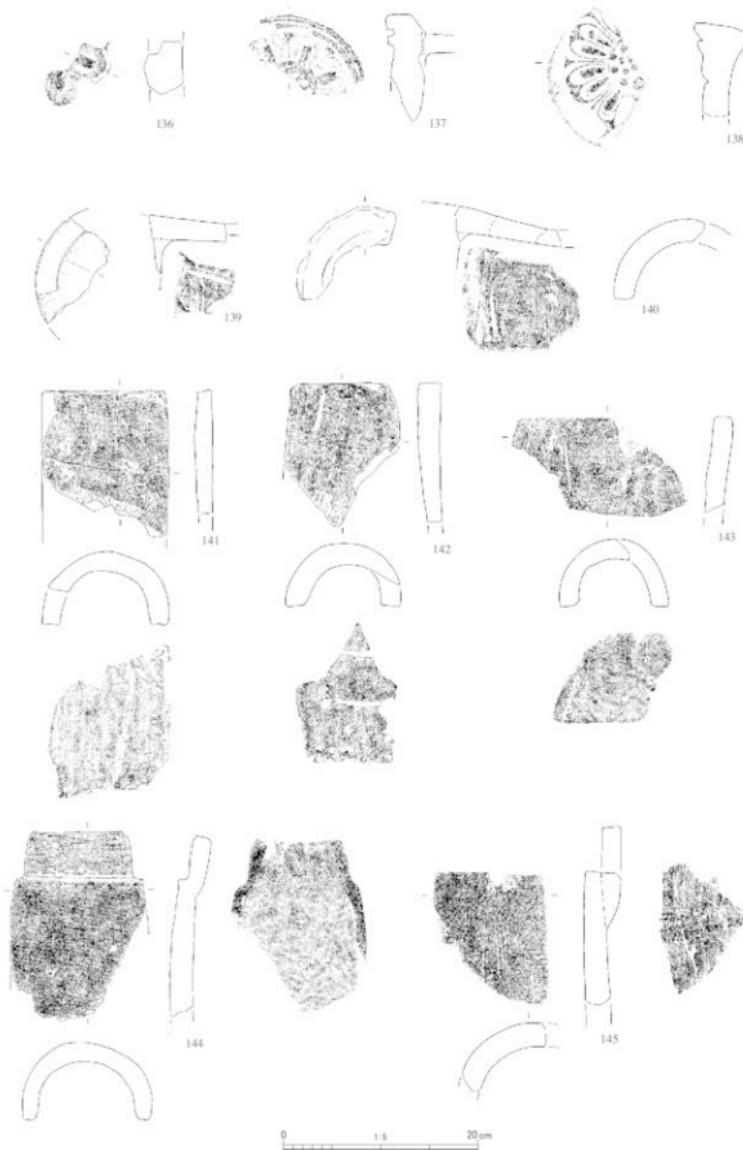


Fig.51 包含層出土遺物（1）

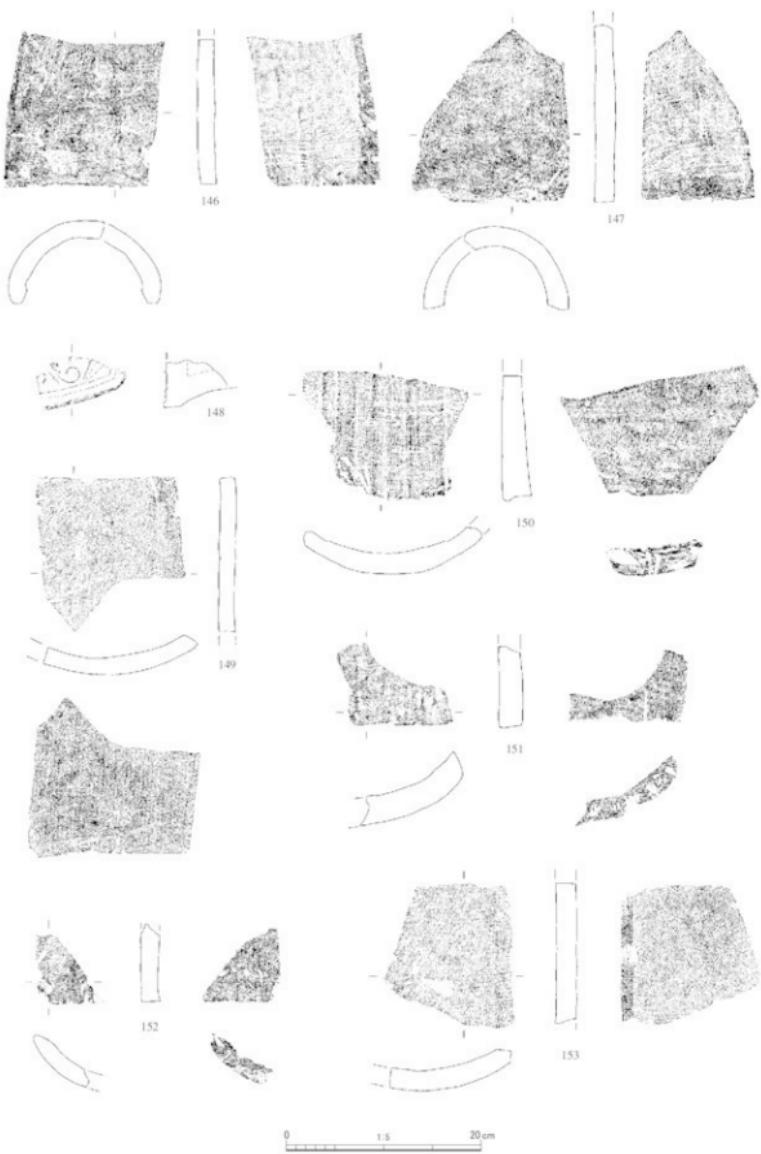


Fig.52 包含层出土遗物 (2)

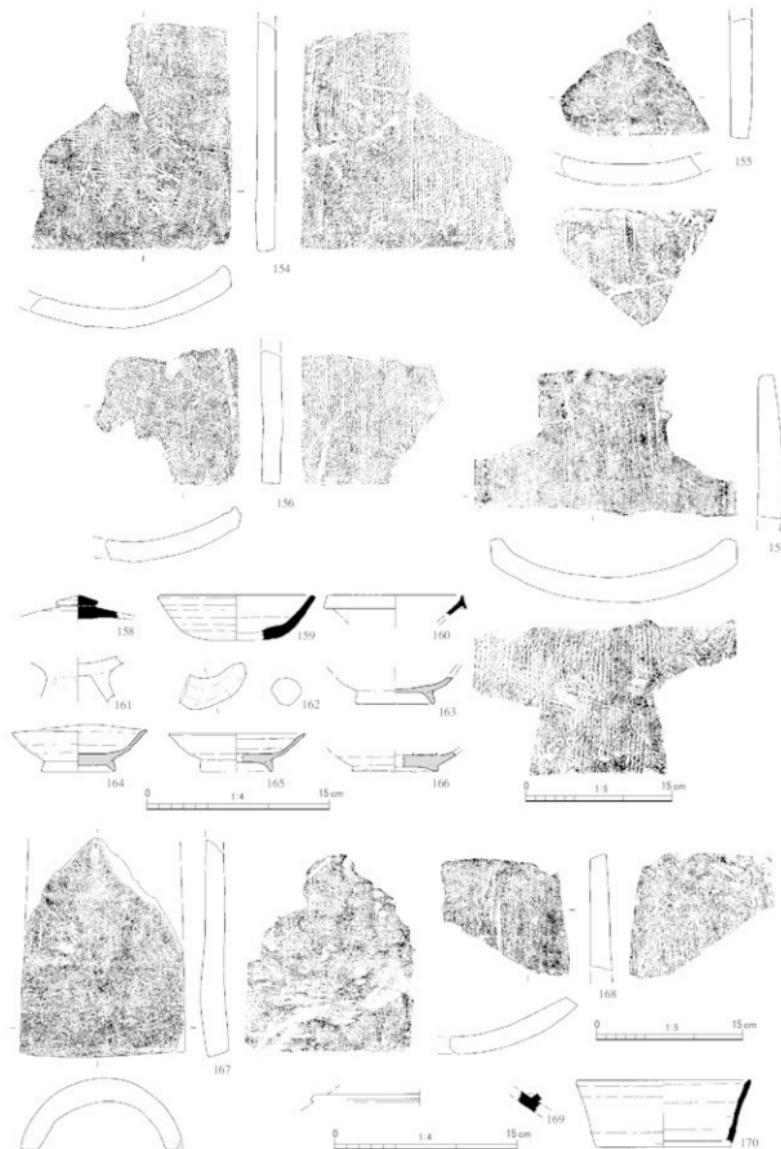


Fig.53 包含層出土遺物(3)、遺構出土遺物
154～166：包含層 167・168：SD05 169：SK02 170：SK04

第4章 総括

1 木船廃寺出土瓦の時期と系譜

時期区分 今回の調査によって新たに確認できた軒瓦は、様式の帰属時期から、1) 白鳳様式期、2) 奈良時代前葉、3) 奈良時代中葉、4) 奈良時代後葉（国分寺造営以後）の4時期に区分が可能である。以下、この時期区分に従い、木船廃寺から出土した古代瓦の系譜について、簡単に触れておきたい。

白鳳様式期 従来知られていた山田寺式（軒丸瓦A類）や川原寺式（軒丸瓦B類）の軒丸瓦が複数例確認でき、瓦当文の観察から、これら白鳳様式の軒丸瓦には複数の范があったことも明確になった。さらに、この時期の所産とみられる重弧文軒平瓦（軒平瓦A類）も新たに確認できた。近年、

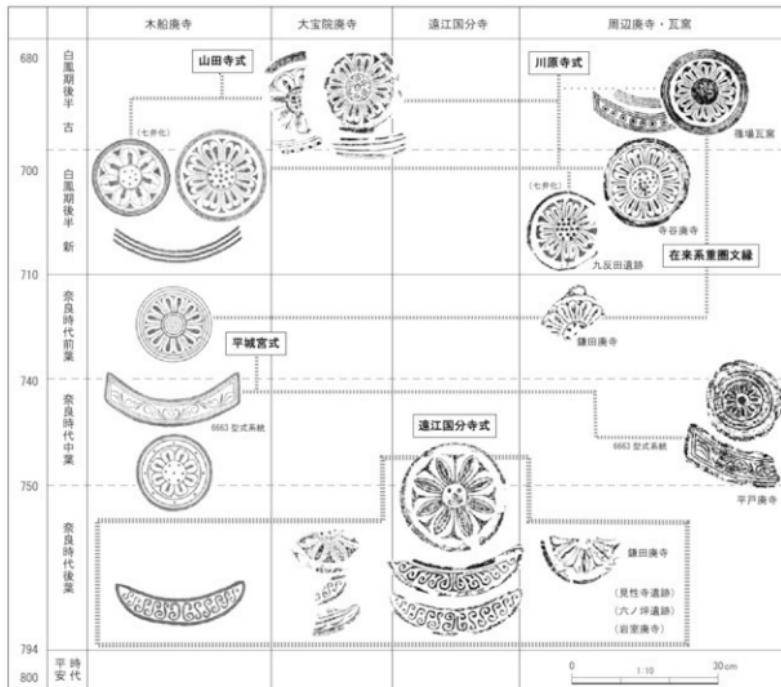


Fig.54 木船廃寺出土瓦の時期と系譜

遠江地域でも白鳳様式の瓦資料が増加し、地域内における編年と系譜関係が明らかにされつつある。山田寺式は大宝院庵寺の事例を祖形に、花弁の小型化や七弁化といった変化がみられる。なお、瓦当面上面を突出させて丸瓦を接合する技法は、大宝院庵寺例と木船庵寺例に共通し、両者の関連がうかがえる。いっぽう、川原寺式においても、大宝院庵寺例や篠場瓦窯例を祖形に、花弁の扁平化や連子周環の省略、連子配置の変則化といった変化がたどれる。以上の視点から、木船庵寺の創建期軒丸瓦は、白鳳様式に属するものの、遠江の中では最新相の段階、実年代では7世紀末から8世紀初頭頃に位置づけるのが妥当といえる。

無段式の丸瓦や桶巻作りの平瓦の多くが、この段階の所産とみられる。木船庵寺の瓦の多くに広端面圧痕という製作技法上の特徴が看取できたことも重要である。広端面圧痕は、白鳳様式期の資料に伴う特徴とみられ、瓦製作技法の詳細が追える属性として注目できるだろう。

当地方における山田寺式や川原寺式の軒丸瓦は、大宝院庵寺の事例を最古とすることがきる。大宝院庵寺は、遠江国府とされる御殿・二之宮遺跡と至近距離にあり、後の国府の設置にかかわった遠江でも最有力の勢力が築いた寺院とみられる。長田郡を代表する木船庵寺もその影響下に創建されたとみてよいだろう。

奈良時代前葉 奈良時代前葉は、在来系の重圓文縁蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦C類）が用いられた段階である。重圓文縁の軒丸瓦は、篠場瓦窯出土品を初出例として、当地域では在来的な様相を深めて定着していく（武田 2004）。奈良時代前半には、鎌田庵寺例のように蓮華文が複弁から単弁（細弁）化する。木船庵寺例もこうした在来の変化を経て出現したものと捉えてよいだろう。

奈良時代中葉 奈良時代中葉は、平城宮 6663 型式系統の軒平瓦（軒平瓦B類）が用いられた段階に位置づけられる。遠江国分寺の造営が本格化し、周辺地域にその影響が及ぶ直前に相当する。遠江国分寺の創建期に一部重複する可能性があり、比較的短期間であったとみられる。

平城宮 6663 型式の軒平瓦は第二次大極殿の主要瓦であり、平城Ⅲ期（天平 17 年～天平勝宝年間、745 ～ 750 年代前半）の所産とされている（奈文研 1991）。ただし、木船庵寺の同系統の軒平瓦は、蓮華文の構成にやや古相を留めていることから（6663B 型式に近似する）、その初源期により近い時期（740 年代）に位置づけておきたい。なお、平城宮 6663 型式と同系統の軒平瓦は、近隣では平戸庵寺に知られる。同庵寺では、平城宮系の軒丸瓦（6313 型式系統）もみられる。遠江国分寺造営が本格化する直前に都城系の瓦が部分的に出現する現象として注目しておきたい。

なお、木船庵寺から出土した外区に珠文列をもつ単弁蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦D類）も、珠文間隔が広いといった後出的要素が強いが、遠江国分寺造営が本格化以前の所産と捉えておきたい。

奈良時代後葉 奈良時代後葉に位置づけられる遠江国分寺式の軒平瓦（軒平瓦C類）が新たに確認された。木船庵寺で確認された遠江国分寺式の軒平瓦はD類（平野 1990）に位置づけられ、遠江国分寺の伽藍整備が本格化した時期のもの（遠江国分寺Ⅱ期）である。

遠江国分寺に供給された瓦は、主に掛川市（旧大須賀町）清ヶ谷瓦窯で焼成された。同系統の瓦は、遠江国分寺に加え、遠江国分尼寺、見性寺遺跡（遠江国衙関連遺跡）、岩室庵寺、鎌田庵寺、大宝院庵寺、六ノ坪遺跡などから出土例が確認されている。これらの遺跡、庵寺は、すべて天竜川東岸に位置しているが、今回の調査によって、天竜川より西に位置する木船庵寺においても遠江国分寺

所用瓦が移動していたことが新たに確認できた。

一枚作りの平瓦のほとんどは、この段階のものと捉えられる。木船廃寺における一枚作り平瓦の割合は、出土した平瓦の4分の1を超えており、国分寺造営以後、木船廃寺にも本格的な補修の手が加わっていたことが分かる。なお、木船廃寺例と酷似した一枚作りの平瓦は敷智郡家周辺寺院である九反田遺跡においても認められる。同遺跡では軒瓦の出土例こそみられないが、遠江国分寺造営の影響は長上郡を越えてさらに西の敷智郡までおよんでいた可能性は高い。

平安時代 木船廃寺から出土した瓦には、平安時代に降る様式のものは知られていない。当廃寺にかかる瓦の補修は、奈良時代のうちではほぼ終了したとみてよいだろう。木船廃寺の廃絶時期は不明確であるが、4トレンチから出土した東遠江産の灰釉陶器（164・165）が示す11世紀頃には既に堂宇の多くが失われていたものと推定できる。



Fig.55 西遠江における古代瓦の分布

2 長田郡家と木船廃寺

長田郡家 木船廃寺は、永田遺跡群（大蒲村東遺跡、森西遺跡、越前遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡）と呼ぶ長田（長上）郡家（以下「長田郡家」と表記する）想定地の中に立地している。長田郡家の中心地はなお不明ながら、本簡が出土した大蒲村東遺跡の近辺が最も可能性が高い地点とみられる。また、規格性が高い掘立柱建物群を検出し、数多くの硯や複数の「北家」墨書き土器が出土した宮竹野際遺跡は長田郡家の別院と捉えられる。地籍図や発掘調査の成果をもとに旧地形を復元すると、永田遺跡群は、宮井戸川とその支流を中心に分布していることが分かる。宮井戸川は芳川から馬込川（小天竜）と合流し遠州灘に注いでいる。古代にはこの宮井戸川を活用した水運によって長田郡家の諸施設が結ばれていたと想定できる。木船廃寺へ供給された瓦も、太平洋に繋がる水上交通網を用いて生産地から運ばれたとみてよいだろう。

こうした周辺遺跡の様相から、木船廃寺は郡衙周辺寺院（山中1982・2005、櫻井1987）と評価できる。その造営主体は、長田郡の郡司層であった蓋然性は高いであろう。

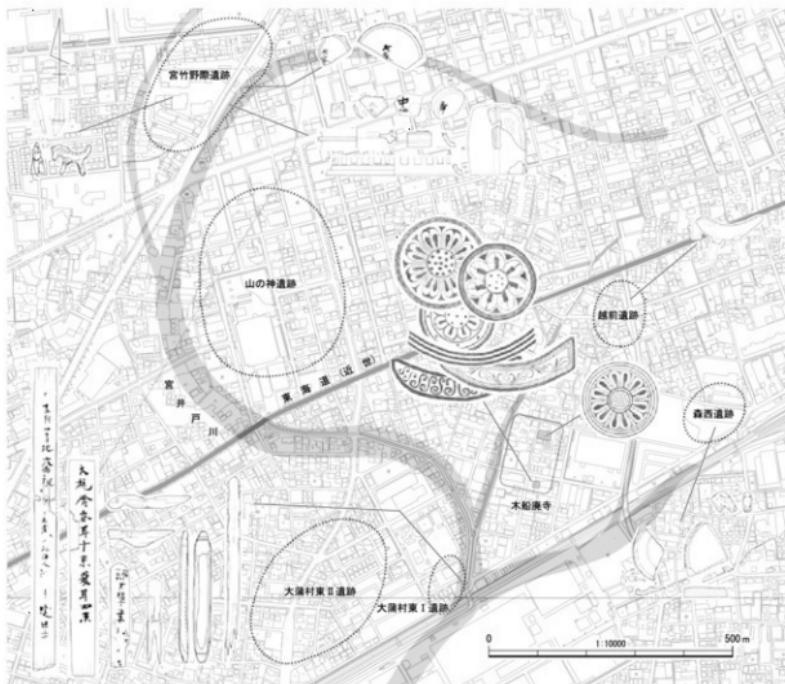


Fig.56 水田遺跡群の詳細

木船廃寺の規模 今回の調査によって、建物の存在をうかがわせる高位面と、瓦の集積（SX01）を確認した。高位面を建物基壇の痕跡と捉えてよければ、今回の調査区に程近い位置に古代寺院の堂宇があったと想定することも許される。今回の調査で明らかになった高位面は、北東の隅を確認したに過ぎず、全体でどの程度の広がりをもつかは不明である。ただし、木船廃寺跡1次調査の結果から考えると、西側に大きな広がりをもつとは考えにくい。

いっぽう、今回の調査地の北側に120mほど離れた木船薬師堂付近においても、古代瓦が集中的に出土する地点（試掘2009-1地点）があり、重圓文縁蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦C類）が採集されている。後世の攪乱によって既に寺院関連遺構の大部分が破壊されているとみられるが、この区域にも木船廃寺の施設が及んでいたことは確実とみられる。また、礎石の出土地点についても、木船廃寺の範囲内もしくは隣接地と捉えることができるだろう。

以上、木船廃寺の規模にかかる情報は限定されるものの、最低でも南北120m以上であったことが判明する。今回の調査地点から東側は範囲外とみられ、西側にある用水路付近までの東西80mほどが寺域として想定可能な範囲といえる。木船廃寺の伽藍配置などは全く不明であるが、出土する瓦の量が限定的で遺構も明確でないことから、小規模な堂宇が連なる程度の規模であったと捉えられよう。

木船廃寺の創建と維持 木船廃寺の創建時期は、軒瓦の年代観から7世紀末から8世紀初頭頃とみられる。大瀬村東I遺跡から出土した木簡の中には、7世紀末に遡る時期のもの（3号木簡）が含まれるので、現状では長田郡（評）家の成立期と木船廃寺の創建時期はほぼ重なるとみてよい。木船廃寺には、その後も奈良時代を通じて、在来系の軒丸瓦や、都城系の軒平瓦、遠江国分寺の軒平瓦などもたらされている。木船廃寺に瓦を供給していた瓦窯は必ずしも明確でないが、瓦に含まれる砂粒の特徴から、天竜川以東の地域に求められる蓋然性が高い。後に国府がおかれる磐田郡域やその周辺は古代寺院の造営が盛んな地域であり、造瓦組織も充実していたとみられる。その中心的存在は、大宝院廃寺や遠江国分寺であった。木船廃寺もこうした地域の中核的な寺院の影響を強く受けたとみられよう。

天平19年（747）の詔では、有力豪族層に国分寺造営の参画を促し、その代償して郡司の世襲化を認めている。木船廃寺の造営者も安定的な郡司任用を目指して国分寺造営に参加し、自らがかかる寺院の修復のために国分寺瓦の提供が許されたと捉えることも可能である。

木船廃寺の特質 今回の発掘調査は部分的ではあったが、当地域の古代寺院の実態と地域史にかかる豊富な情報が得られた。新確認の軒瓦に加え、丸瓦、平瓦にかかる数多くの属性を明らかにした点も特筆できる。

木船廃寺は、長田郡の郡司層が地域秩序の精神的な核とすべく、7世紀末から8世紀初頭頃に創建した氏寺とみられ、郡衙周辺寺院の典型例といえる。どの程度の伽藍を備えていたかは不明な点が多いが、奈良時代中葉には都城系の瓦を、奈良時代後葉には遠江国分寺の瓦をもって補修が繰り返されている。長田（長上）郡の郡司層が国分寺造営に参画していた経緯がうかがえるとともに、供給された瓦が中央もしくは国司勢力との関連が強いことから、木船廃寺は定額寺としての寺格（菱田2011）を得ていた可能性が指摘できる。

【参考文献】

- 石田茂作 1962『遠江国分寺の研究』豊田市教育委員会
- 福知晋也 1998『東海道古瓦の系譜（三）－遠江－』『皇學館大學史料編纂所報』第158号
- 梶原義実 2010『国分寺瓦の研究』名古屋大学出版会
- 櫻井信也 1987『評・都術接寺院について』『尋源』第37号 大谷大学国史研究会
- 静岡県 1992『静岡県史』資料編3 考古三
- 武田寛生 2004『重巻文縁複弁蓮華文軒丸瓦－いわゆる「石川寺式」軒丸瓦と東海地方－』『設立二〇周年記念論文集』
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 武田寛生 2006『地方寺院と都術』『古代の役所と寺院－都術とその周辺－』静岡県考古学会
- 奈良国立文化財研究所 1991『平城宮発掘調査報告書XIII』
- 奈良国立文化財研究所 1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』
- 菱田哲郎 2011『定額寺の修理と地域社会の変動』『仁明朝史の研究』思文閣出版
- 平野吾郎 1990『遠江・駿河における屋瓦と寺院』『静岡県史研究』第6号
- 平野吾郎 1994『遠江国分寺の造営と地方豪族の動向』『古代』第97号
- 松井一明ほか 1992『遠江・駿河・伊豆』『古代仏教東へ』東海埋蔵文化財研究会
- 山中敏史 1982『評・都術の成立とその意義』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 山中敏史 2005『地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題』『地方官衙と寺院－都術周辺寺院を中心として－』
奈良文化財研究所

【永田遺跡群主要文献】

- 浜松市遺跡調査会 1982『越前遺跡発掘調査報告書』
- 静岡県教育委員会 1978『浜松市木船遺跡』『静岡県文化財調査報告書』第18集
- (財) 浜松市文化振興財団 2004『大浦村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』
- 浜松市教育委員会 1988『宮竹野際遺跡』
- (財) 浜松市文化振興財団 1994『宮竹野際遺跡2』
- (財) 浜松市文化振興財団 2005『森西遺跡』
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006『宮竹野際遺跡』

【図出典】(Fig.54, 55, 56)

- 大宝院庵寺：豊田市教育委員会1996『大宝院庵寺遺跡第7次発掘調査報告書』、篠場瓦窯：浜北市2004『浜北市史』資料編、原始古代中世、寺谷庵寺・鎌田庵寺・平戸庵寺：静岡県1992『静岡県史』資料編3考古三、九反田遺跡：(財)浜松市文化協会1997『九反田遺跡』、遠江国分寺：(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所1995『遠江国分寺跡の調査』、宮竹野際遺跡：(財)浜松市文化振興財団1994『宮竹野際遺跡2』、(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所2006『宮竹野際遺跡』、越前遺跡：静岡県教育委員会1978『浜松市木船遺跡』『静岡県文化財調査報告書』第18集、大浦村東Ⅰ遺跡：(財)浜松市文化振興財団2004『大浦村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』、森西遺跡：(財)浜松市文化振興財団2005『森西遺跡』、楠木遺跡：浜松市教育委員会2011『平成21年度浜松市試掘調査概要』

【謝 辞】

本書の作成にあたり、以下の方々のご協力、ご教示を得た。その名を記して謝意を表したい。

梶原義実、清野孝之、武田寛生、菱田哲郎、平野吾郎、向坂鋼二

図 版

PLATE



1954年出土軒丸瓦



瓦集積検出状況（2トレンチ、南東から）



1 調査区全景（南東から）



2 1トレンチ SD01（北東から）



3 1トレンチ SK04（南西から）



1-2 トレンチ検出遺構（北東から）



2-2 トレンチ SD01（北東から）



3-2 トレンチ SX01（東から）



SX01 検出状況（北西から）



1 SX01、SD01 検出状況（北東から）



2 SX01（東から）



3 SX01（北西から）



Fig.24-1

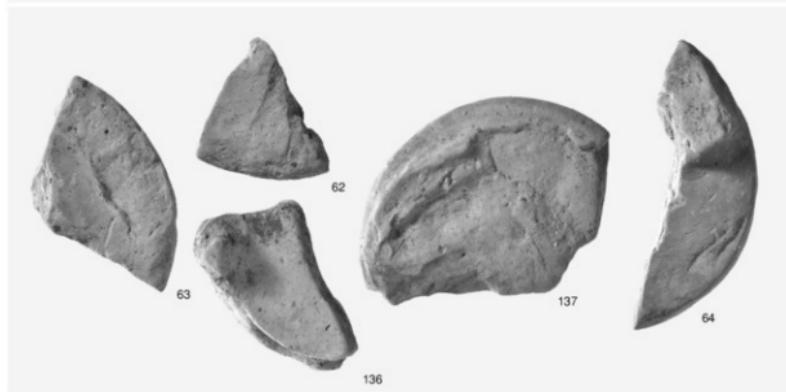
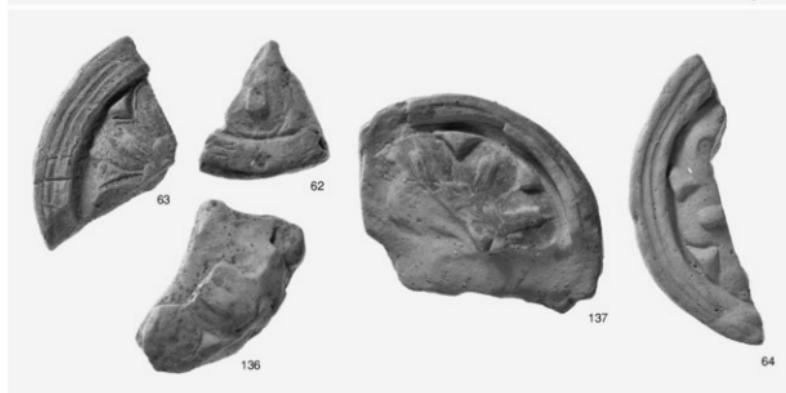




Fig.24-7

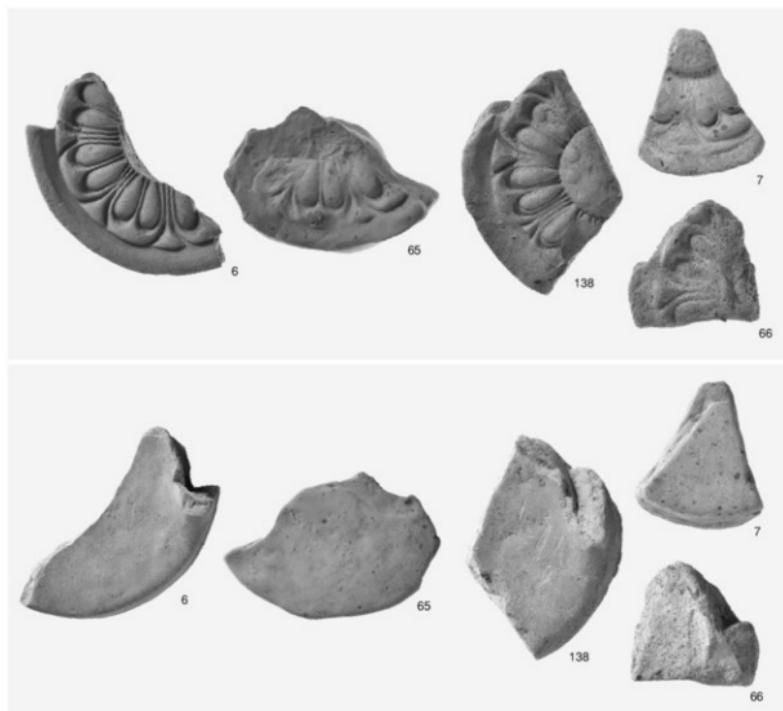


Fig.24-8



Fig.25-5

軒丸瓦B類（1）



1 軒丸瓦B類 (2)



Fig.25-7

67

2 軒丸瓦C類

3 軒丸瓦D類



1 主要軒平瓦



2 軒平瓦



15

8



69

9



12



Fig.29-3



23

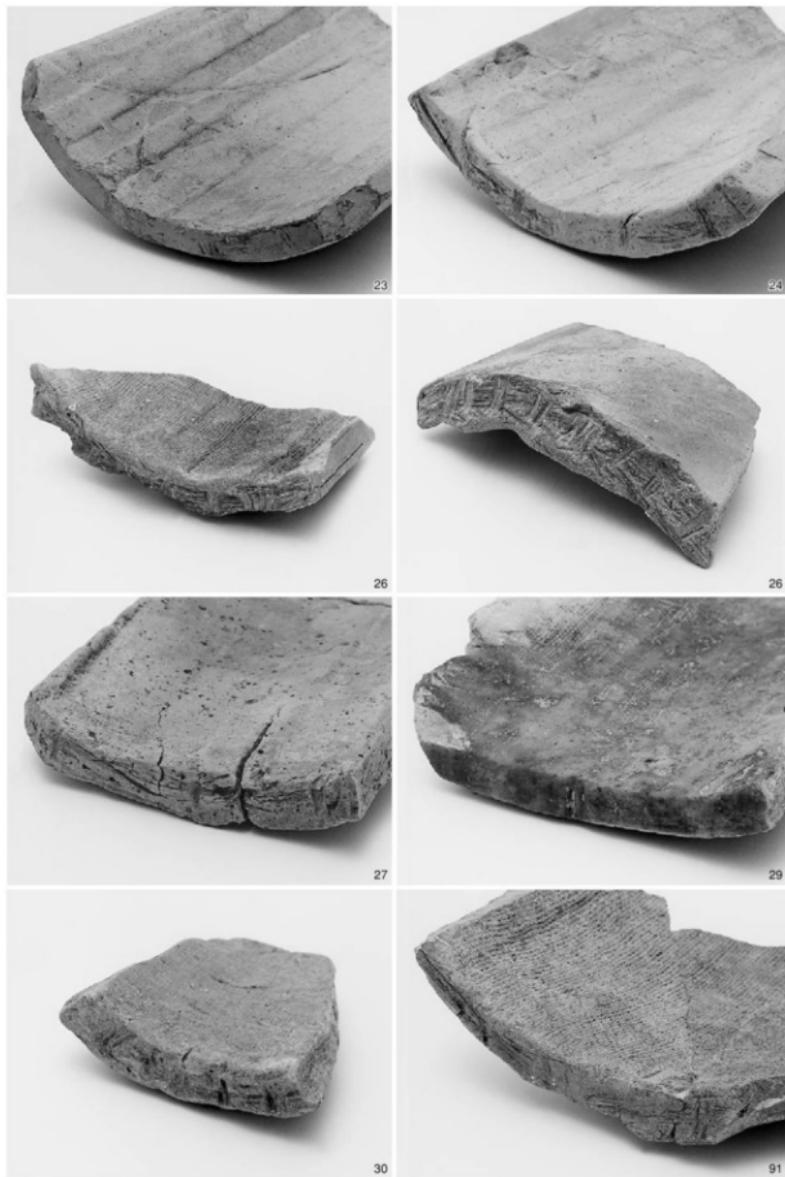


24



25

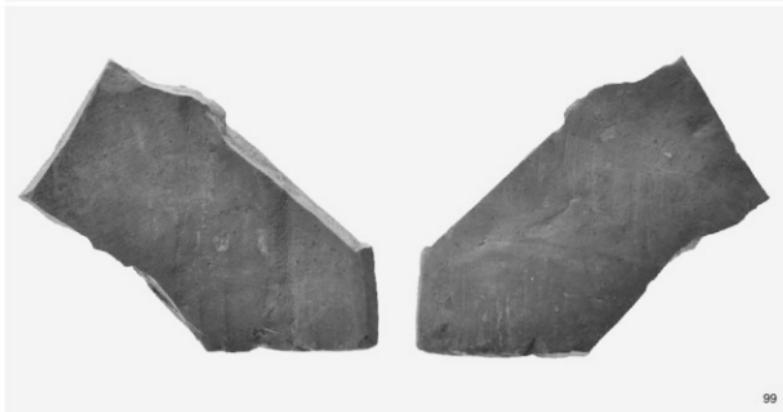
平 瓦（桶巻作りの諸例）



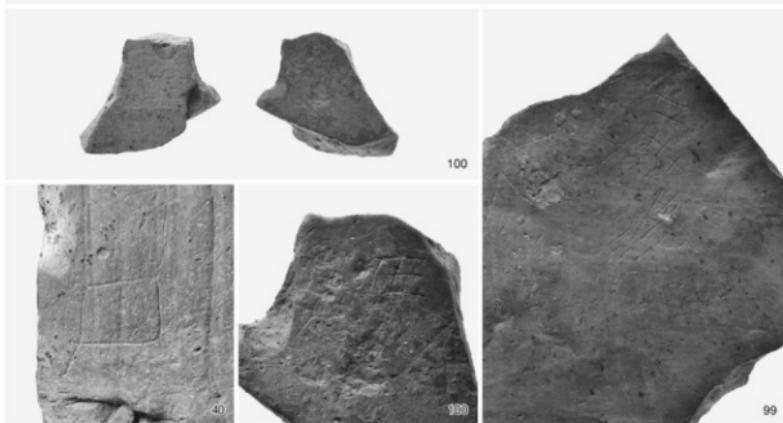
平 瓦（広端面圧痕の諸例）



40



99



100

40

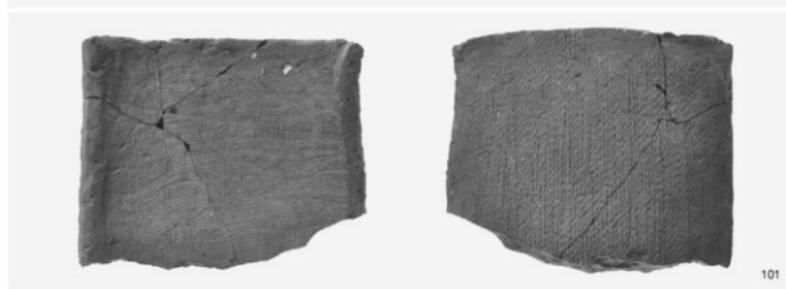
99

99

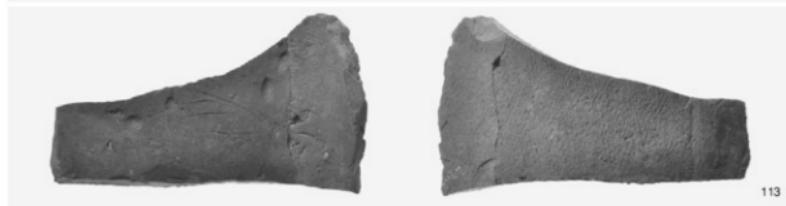
平 瓦（線刻の諸例）



Fig.30-3



101



113



154

平 瓦 (一枚作りの諸例)

報告書抄録

書名（ふりがな）	木船廃寺跡 2次（きぶねはいじあと 2 次）							
編著者名	鈴木一有							
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中央区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-0946 浜松市中区元町103-2 TEL（053）457-2466 FAX（053）457-2563							
発行機関	(財)浜松市文化振興財団							
発行年月日	2011年3月10日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村		遺跡番号						
木船廃寺跡	静岡県 浜松市東区 和田町	22202	02 06 04	34度 42分 55秒	137度 46分 22秒	2010年 8月16日 ～ 2010年 8月31日	130 m ²	保育園舎増築に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
木船廃寺跡	寺院跡	飛鳥時代 から 奈良時代	土坑 瓦溜り 溝	瓦、須恵器	飛鳥時代後期（白鳳期）に創建された浜松市内最古の寺院跡。寺域の存在を初めて確認し、多彩な軒丸瓦、軒平瓦が出土した。			

北緯、東經は世界測地系の数値である

木船廃寺跡 2 次

2011 年 3 月 10 日

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市文化財課

(教育委員会の補助執行機関)

〒430-0946 浜松市中区元城町 103-2

発行機関 財団法人 浜松市文化振興財団

印 刷 中部印刷株式会社

Kibune-Haiji

The 2nd excavation report

A Report of Archaeological Investigations on 7th-8th
Century Temple in Western Shizuoka, Japan



March, 2011

Hamamatsu Cultural Foundation